

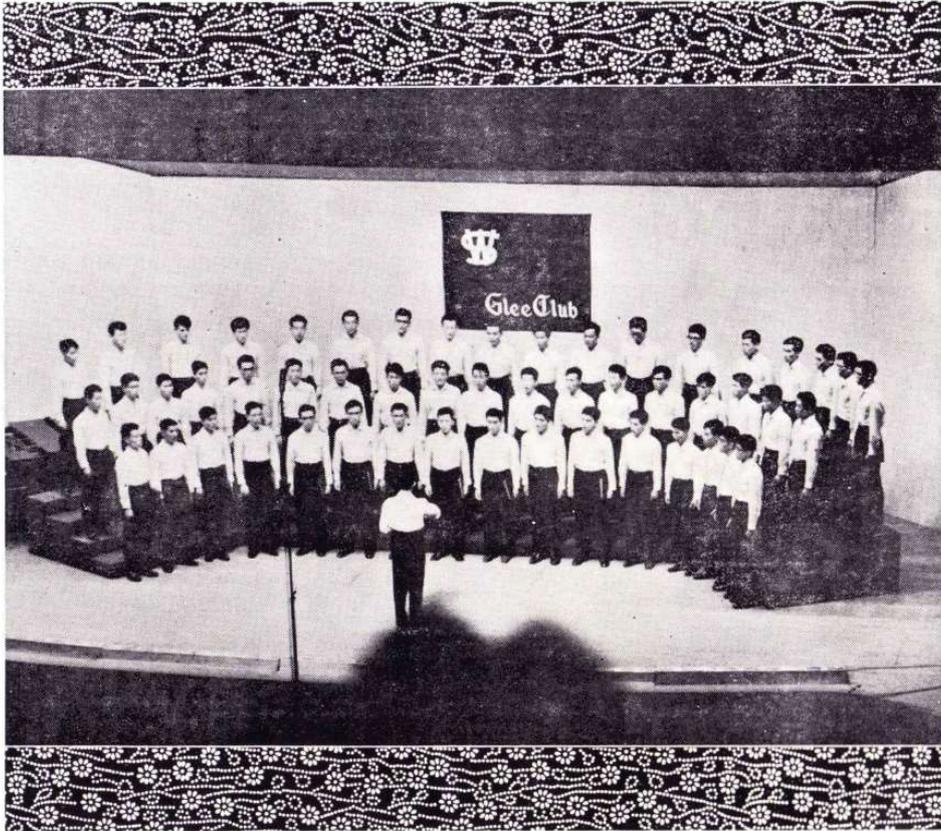
## 西南学院グリークラブ創立四十周年記念誌

# 四十年の歩み

昭和 35 年 12 月 30 日発行

### ③第二次世界大戦後

- ・これは 1960 (昭和 35) 年に西南学院グリークラブ創立 40 周年を記念して作られた記念誌を 2018 年、同創立 100 周年を前にデータ化したものである。
- ・今日においては不適切と思われる表現が用いられている個所もあるが、その資料性からそのまま掲載している。
- ・誤植と思われる語句については脚注にコメントをしている。
- ・二文字の繰り返しは繰り返し記号を用いてあるが、横書きにしたため、言葉に置き換えた。
- ・地名の柳川については「柳河」を用いられており、そのままとした。
- ・久留米の「留」は「ツ」の下に「田」という字を用いている例が多いが「留」に置き換えた。
- ・毛屋禎吉氏の「禎」は示す偏に「貞」であるが、該当文字がないため「禎」に置き換えた。



Uh Seinan!

'Neath the stately pines By the ocean blue,  
Stands our college fine, To thee we'll be true, be true.  
Ah Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,  
Ah Seinan! dear Seinan! For thee we will be true and strong.

And the dear old campus, with its friendly shade  
Where sweet friends greet us, From our minds won't fade, won't fade.  
Ah Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,  
Ah Seinan! dear Seinan! For thee we will be true and strong.

Too soon we leave thy care, And part from friends so dear,  
But all our fame we'll share With our Alma Mater.  
Ah Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,  
Ah Seinan! dear Seinan! For thee we will be true and strong.

A Graves

## 四十年の歩み

- 再建時代（昭和二十年）  
再建時代の沈黙（昭和二十一年）  
沈黙からの脱出と栄光（昭和二十二年）  
低迷時代（昭和二十三年）  
転換期（昭和二十四年）  
低迷から躍進へ（昭和二十五年）  
回顧録 石田昭  
美しい五月 木村正明  
全日本合唱コンクール初出場（昭和二十六年）  
躍進（昭和二十七年）  
全盛時代（昭和二十八年）  
西南学院グリークラブと私 福永陽一郎  
合唱談話 毛屋禎吉  
随想 進藤邦彦  
思い出 長弘  
合唱熱高まる…合唱団誕生（昭和二十九年）  
敗北から勝利へ（昭和三十年）  
思い出 小島八郎  
**Cool Water**  
再び敗北を喫す（昭和三十一年）  
シャントゥール独立演奏会開く（昭和三十二年）  
第一西部三大学合同演奏会開く（昭和三十三年）  
創立四十周年記念演奏会開催す（昭和三十四年）

## 再建時代

### <昭和二十年>

一九四一年（昭和十六年）十二月八日、野村大使がハル米國務長官に最後通謀を手渡したとき、既に真珠湾では、日本機の第二次攻撃が始まっていた。予定より遅れた一時間の狂い。日本の暗い歴史のトビラは、かくて一方では奇襲成功の歓喜と一方では騙し討ちの憎悪を綴ってめくられた。このようにして一方的勝利から始まった太平洋戦争は、ミッドウェー海戦、そして特攻作戦へと次第に敗色をこくして行き、一九四五年（昭和二十年）八月、広島、長崎への原子爆弾投下をもって、遂に日本は無条件降伏による終戦を迎えたのである。戦争中、グリークラブのメンバーは、その合唱訓練による耳の良さをかわれて、幾人ものが空を飛び、また特攻隊として戦艦に突入したのである。昭和十八年七月十日、現在の学院高校講堂で開かれた第九回定期演奏会の最後に歌われたグノーのファウストの中より「兵士の合唱」のステージを最後として姿を消したグリークラブも、終戦を迎え、戦場からは学徒出陣として出征していった学生が続々と帰国し、また外地からも先輩等が帰国してきた。昭和二十年十月に、これらの復員者を中心として、十名の部員をもって再興した。メンバーは、指揮は松本信義、トップテナー渡辺文二郎、刀根享一、セカンドテナー上田博明、高橋博一、バリトン川村鈴二、西山文史、ベース伊賀良雄、石田昭、生野真臣であった。当時は服装も終戦時のことで復員のままの軍服、軍靴のいでたちであった。また食糧も充分でなく、「さつまいも」を食べ、「さつまいも」の弁当で歌いつづけた。当時は楽譜も少なかったが、楽譜を読みこなす者もいなかったので、丸暗記で各パートの練習をやっていた。

戦後最初のコンサートらしきものは第一回のステージである、昭和二十年の「クリスマス・コンサート」であった。曲目は「胸のただ中」と「権兵衛が種まく」の二曲であったが、技術的にあまり良いものではなかった。当時の福岡の音楽ファンは音楽に飢えていたが、地元のピアニスト佐藤博子が、早くも二十年十一月には演奏会を西南学院講堂で開いた。昭和二十一年、新入生を迎えて、グリークラブは戦前の部活動の形を着々と整えていった。六月には開学三十周年の記念音楽会として、関種子史のソプラノ独唱会を開いた。これを契機として、演奏旅行、ラジオ放送と種々の活動をなすに至ったのである。秋には日田市公会堂で、当所に於ける戦後の第一回演奏会を開き、冬にはNHK福岡放送局から合唱を放送した。当時は食糧も不足し、誰もがその日暮しのような不安な生活を送っていたが、歌こそ唯一の心の糧であった。従ってみんな一生懸命に練習に励んだが、楽譜が少なくて苦労した。その頃の福岡の音楽界といえば、合唱関係では、混声で森脇憲三氏指揮の福岡放送合唱団と、石丸寛氏の「合唱協会」が対抗、男声では、我々グリークラブと福岡高校合唱団が対抗、女声では福岡県立女子高等学校と福岡女学院高校とが対抗し、それぞれ賑やかに競争していた。また、福岡の音楽界にはフランス帰りのピアニスト原智恵子が来福し、音楽ファンを喜ばした。戦後のグリークラブの復興に努力した石田昭氏（昭和二十二年卒）は当時の状態を次のように語っている

「終戦後、二十年九月の或るひっそりした午後だった。戦時中入学した少数の学友も、大半は応召しており、今日二人、昨日一人と学国<sup>1</sup>に戻って来、お互いの命ありけりの再会をささやかに飲んでしたが、ガランとした教室の半ばは、空席のまま松籟のみの空白の時間が過ぎていた。当時の表現をかりれば、空虚と或るアヌイな空気で学園も覆われていた頃だった。そんな初秋の午後、藤井教授より松本君と

<sup>1</sup> 原文のママ

私にグリー再建の重大相談を受けたのだった。確かに一種の光にも似た緊張と憧憬を覚えたものだったが、戦争を契機として、先輩並びに学園の歴史と隔絶されていた私達にとって、グリーの正体、再建の方策がある筈はなかったが、グリーc再建の言葉だけは神秘的響きさえもって我々を魅了してしまったのである。しかし、一旦少女のような興奮から醒める<sup>2</sup>と、事の重大さに、正直これは困ったことになった、と溜息ばかりだった。雰囲気だけを感じようとしている二人にとって出来たことは、何でもよいから、ともかく、未知の先輩に相談してみようということだけで、早速、井上さんの所に挨拶かたがた援助を受けに行ったのだが、戦前グリー黄金時代の華やかな活動ぶりを散々吹き込まれ、またしても無邪気な幻覚に酔わされ、蜃気楼を見たような気持で辞したのだった。早速、部員を狩り集めることが先決と、翌日、募集のビラを校門に貼り廻ったが、実際、我々の興奮はまたしてもそれまでのものだった。人さえ集まれば、グリーの栄光がそのまま甦みがえると思っていたことが大なる誤算であり、それでもなく、一人くらいはマトモな音楽素養のある奴が引っかかってくると考えていたことが間違いのもどだった。中学部の講堂へ泥軍靴の音も無遠慮に、顔だけは神妙に入ってきた一年生の諸君を見た時は、意外な戸惑いを覚えたものだった。凡そ歌を歌おうという人達とは縁遠いような妙なニュアンスの野郎達ばかりだった。メて十人、何れも払い下げ軍服に軍靴。時節柄、満腹した顔はなかったが、しかし神経だけは凶太そうな方ばかりだった。しかし解らぬもので、この生粋のグリーメンによって、後日、戦前を凌ぐ黄金時代が築き上げられたのだ。数カ月後出現した石丸寛氏の指揮者の指導が偉大であった如く、この人々も優れた素質に恵まれていたのであろう。が、当時はこのような状態だった。何れにしても盲蛇でも結構、木偶の坊十人は一見頼もしい限りだった。二人が十人の同志に膨れ上がったのである。かくして形式的グリー復活の頁が開かれたのである。しかし単純素朴なこれら同志が、各々その純朴さの故に、それから半年間、泣くに泣けない惨めな立場に追い込まれようとは誰も考えていなかったことだろう。無知の情熱ほど烈しいものはなく、それほど苦しむことはないだろう。戦争中のあるかなきかの音楽教育しか受けておらず、それもピアノの胴に彫刻して喜んでいただろう悪童のなれの果てがグリーという、のっぴきならない刻印を押されたことは、出発よりして悲劇の要素充分だった。ともかく、翌日は勢揃いして井上さんを迎え、早速、声の試験だった。地声をしぼり出すことによって簡単にテナー、ベースと分けられ、曲りなりにも各パート二名の男声合唱団が講堂のステージの上に並ばせて貰ったのだった。先輩の推薦により、「胸のただ中」と「権兵衛が種まく」の二曲の楽譜と呼ぶものを貰った時は正直嬉しかったが、また、目馴れぬオタマジャクシは味気ないものだった。それから数日間は、宮本、井上、平野、今村、井手の先輩諸氏に来ていただいて、楽譜の講義等は時間も許さぬし、消化不良の恐れもあったためか、四部合唱のブツツケ本番ばかりの指導を受けた。その方法も、各パートごと講堂の四隅に分散され、先ず自分のパートにフリガナをつけ、更にそのパートを歌って貰い、その音を吸収したら忘れない中に口から吐き出す状態だった。文字通りの口伝えだった。やっと面白くもない低音部をどうにか覚えた気で各パートの音を組み合わせると、他の声に引き込まれるパート、途中で消えるパート等、またまた我々の目的とする怪物の正体を見せつけられたのだった。各々满身創夷血まみれの状態だった。「他のパートは絶対聞くな」との速効訓練。「間違っても声だけは出すように」との適切な指導も神経を消耗するだけで、指導者と我々が、お互いに傷つけ合い苦しめ合って、何時終るとも知れない空しい闘いを続けねばならなかったのである。しかし、曲りなりにも一本の軸を得て始動したかに見えた練習も、先輩諸氏が折を見、暇をさいて来て頂いている中は良い方だ

---

<sup>2</sup> 置き換え：原文は目偏に星

った。人々の情熱と行動が、ただ、生きることに操られている戦後の末期的状態の中では、誰も学生達を顧みる余裕はなかったのだ。単独の練習は徒らな雑唱から何時尽きることもない議論に何時か移り、それにも疲れて、みな窓によって海に落ちる真赤な太陽を黙って見つめている時間が永くなった。薄暗い講堂の隅で、一人でも誰か口を開けばグリーは崩れてしまうような一言をみな胸に抱いたまま黙って坐っていた。一人一人が惨めだった。無謀な企てだったというより、余りに惨めな結果だった。残っていたのは、伝統にうちひしがれ、おしつぶされた若者の顔でしかなかった。技術の敗北は彼等を挫き、彼等の目的を破壊し、彼等の団結をむしばんでいったのだ。「合唱に何より大事なものは心のハーモニー」だという先輩の高邁な教訓を当時のグリーメンは、驚くほどの単純な無邪気さをもって口にし、実践していたのだ。教室の中に、校庭の隅に、郊外に……。共に行動し、常にグループを形成することが、創造に直接つながっているものと盲信していたのだ。そして毎日々々の練習には驚くほどの生真面目さをもって、一人残らず集まったものだった。それは楽しむためでもなく、また歌うためでもなかった。ただ互いの疲れ切った顔をつき合わせて、怒ったり、笑ったりしながら、組んだ腕だけを確かめようとしているだけだった。集まるのが各人の義務であり、自由への回復等ということは忘れ去ったように。尤も当時は娯楽とては何一つなかった。戦災の街にやっと国際劇場一つが復興し、みなが粥をすすり、芋を常食としていた頃なのだ。喫茶店という名の店も市内中探しても二、三軒程度で、凡そ名前とは無関係の如き、メリケン団子の雑炊オンリーの味気ない時代だった。人々は、その日その日の食う物もロククロくない頃だった。そのような時代の中であって、たとえとあだ名ばかりとはいえ、グリークラブ・メンバーとしての誇りと夢は大きなものであり、ただ、それだけが最後の紐帯ともいえるものであった。しかし何時までたっても練習らしきものも出来ない状態

では、漸く部員間の軋轢と葛藤を生じ、破綻を招くのは明らかだったそれを辛うじて支えたのは、昭和二十年のクリスマス演奏会だったのだ。校内クリスマス演奏会の四つ切用紙ガリ版刷りのプログラムに容赦なくグリークラブの名が刷り込まれ、部内の内紛どころではなくなったのだ。挙国一致内閣の如く、いざこざを包みかくして、ともかく表面上、従容として主催の称に応じたことは最早や悲壮以上のものだった。戦後、校内文化活動の第一歩を踏み出したと一般学生に信じられ、その誇張宣伝と、学友達の歓声を浴びて、憐れにもこの善良な十人の若者達は、興奮と、恐怖のまま芋殻のように、ステージの上に駆り出されたのであった。「胸のただ中」「権兵衛が種蒔く」の二曲。時間にして四分曲、膝は震え、頭は熱を帯び、咽喉は乾いたボール紙の如く、唇は徒らにケイレンするだけの、永い永い時間だった。アトラクション以下の惨たんたる最初の敗北だった。しかし、この気の良い不逞な若者達にとって、結果は問題ではなかったようである。とにかく生まれて初めてステージに立ち、何とかガリ版刷りのプログラムだけは埋めたという重感だけが残っていたのである。そしてその晩、「矢でも鉄砲でも」の氣勢に活気づき多端の昭和二十年を送った。

## 再建時代の沈黙

### <昭和二十一年>

そして昭和二十一年、新春を迎えるや再びしぼんだ風船の如く、また繰り越しの課題にマトモに向かわされていたのだ。また十人の部員が割れることは許されなかった。単なる数学的存在の貴重さを各人が背負っていたからだ。そして、先輩は不熱心、不親切だというレッテルの下に、反抗児童は先輩諸氏と断交状態に入ってしまったが、その後は、旱天の放浪児の如く、中学部の古沢教授に教えを乞い、街の音楽家を無償で連れ出したり、いろいろあがいてはみたものの、結局、自分達の無力と「没法子」の諦観を深くするばかりだった。かくて反抗期は終り、家出息子達は、叱られた上、再び先輩の指導を乞うほか途が残されていなかったのである。当時グリーの先輩達は、五丁目で音楽事務所を経営されていたが、「学生達は事務所まで放課後通勤のこと」を申し渡され、毎日、小羊の如くゾロゾロつながって指導を受けに行かねばならない破目になったのである。当時の先輩はみな復員帰りでもあるし、互いに頗も知らぬ他人先輩であったためか、親近感どころか怖い人達という印象が強く、我々は前世紀のギルドの徒弟のような劣等感と圧迫感を覚えたものだった。そして、そこの二階で、有名な「オキアガリコボシ」「村の鍛冶屋」の二部合唱の練習が、先輩、後輩の根くらべの試金石の如く歌い始められ、雨の日も、風の日もレビートされていたのだ。来る日も来る日も、童謡二部だった。しかし、そんな油のような状態からグリーメンが生き生きとして躍り出しタドタドしき合唱への巡礼達が駆け出す時期が遂にやって来たのは、昭和二十一年の春、専任指揮者に石丸寛氏を迎えたときだった。今までの忍従と非生産的な屈辱と怒りが爆発的情熱となって、この指揮者を擁し燃え上がったのだ。ロシア民謡、フォスターの本格的男声四部を貧るように歌い歌った。今までの孤児達は音を立てて新しい指揮者、初めての指揮者に取り組んでいったのだ。今までの一切はここで終りグリー復活の幕が今、開かれたのだった。そして三ヵ月後、初の合唱祭に西南グリークラブは華やかな脚光を浴びて見事に復活し更に三ヵ月後（昭和二十二年六月）の戦後第一回合唱コンクールの「カチューシャ」において「オキアガリコボシ」の涙は結晶し、苦しかったことへの訣別と共に、この世のものならぬ、しびれるほどの感激が到来して来たのである。＝現文のまま＝

## 沈黙からの脱出と栄光

### <昭和二十二年>

やっとグリークラブも戦前の永準に達した。活動も一層盛んになっていった。演奏旅行におけるステージの数も多くなっていった。二月、唐津女学校講堂。この演奏旅行をした時は丁度大雪だったが、演奏後、皆でドッと「ぜんざい屋」に押し入り、皆がお代りの連続で、店のおばさんは誰が何杯喰ったか判らぬのをよいことに、三杯喰って二杯分の金しか払わなかった等というエピソードがある。三月、日田市公会堂（第二回）六月、日田市公会堂（第三回）ダブルカルテット。七月、「戸畑女学校講堂、小倉西南女学院講堂。又十一月、小倉西南女学院講堂にて創立二十五周年記念音楽会。その他久留米高女講堂、柳川高女講堂といったように各地でも活躍した。しかし昭和二十二年で最も歴史的な出来事といえ、六月一日、九州大学医学部中央講堂で行なわれた第一回朝日合唱コンクールで優勝したことであろう。課題曲は「水夫のセレナード」。そして自由曲は石丸寛氏作詞編曲による「カチューシャ」。

しかもこれは西南学院グリークラブが本邦初演の曲であった。この曲で強敵であった福岡高校合唱団を破って優勝したことは極めて印象深い。二位は山口師範メンネルコールであった。当時のことを末広忠勝氏（昭和二十五年卒）は次のように語っている。「確か九大医学部講堂での西部合唱コンクールで仇敵福岡高等学校を破った時は嬉しかった。先方はグリー何するものぞの意気込み、うちは今度こそ雪辱に燃えていた。課題曲は「水夫のセレナード」、自由曲は「カチューシャ」だった。福高が先で、彼等は唱い終るやワッとばかり雀踊りしながらの退場。つまり上出来、会心の出来ばえだという自信そのままの態度であった。ところがグリーのロシア民謡「カチューシャ」は会場を水をうったように黙らせる効果も十分に、見事、多年の雪辱を遂げ、福高の連中の鼻をあかせたものである。勿論、我々は静かに、そして紳士的に退場したのであった」と。又、林照樹氏（昭和二十四年卒）も次のように語っている。「私共のグリークラブの演奏旅行は何といっても日田三隈川辺（筑後川上流）にある亀山公園内にて朝もやをついて発声練習、曲目練習を石丸氏を囲み一生懸命に行なった思い出である。とにかく石丸寛氏の練習法は随分厳しかった。ピアノのキイを何度もたたいて一人ずつの発声、音階をみっちり試されたものだ。別に楽しむ遊びのない時代、みな楽譜読みも幼稚単純ながら、その情熱だけは現在のグリークラブ部員にも負けないものを持っていたと思っている。二部合唱「帆綱は歌うよ」「おきあがりこぼし」等より始めて四部に進み、自主的練習計画を進め、着々その土台は築かれ、伝統の西南グリーの面目躍如たるものがあつた。西部第一回合唱コンクールの時、それまで断然秀れていると見られれていた旧制福高音楽部を退け見事優勝の栄冠を勝ち得た時の喜びは今も臉に残っている。それ以後、男声合唱としての西南グリークラブの名は全国に響き渡ったが、豊かな声量のベース、ソフトなテナーの多いグリークラブとして変らぬ評判でした。ベースには石田氏、生野氏、西脇氏、長君、テナーは刀根氏、西山君、本村君、毛屋君、進藤君、西伊宗氏は特にソフトな声質の持主で有名であった。第一回合唱コンクールの自由曲は今でこそ全国に広く知れわたっている“カチューシャ”であり、あの親しみ易いメロディー、感動的なリズム、素晴らしいハーモニーで満場を興奮と歓喜一色の拍手で湧かしたものでした。その頃の悲しい時代の一般の人達が如何に心が渇き、すさんでいたか。この一曲が当然に福岡の人々に潤いある泉として心の糧となったか計り知れないものがある。この曲を編曲した石丸寛氏はロシア大使館まで出かけ、音をつくり出すのに苦労した由、いわばこの曲の草分けは石丸氏である。（「カチューシャ」は松本氏、井手氏、石丸寛氏が東京のソ連大使館に出張し楽譜をねだったが、兵隊に聞けといわれ、アコーディオンにあわせて兵隊が歌うのを聞いたが“カチューシャ”という所しかわからなかったので作詞した）……と。

「カチューシャ」の次に「深い河（黒人霊歌）」が哀調あるメロディで、何かを諦め、歌の中に自分の祈り、夢を折り込み切々とした調子が聴衆の心を魅了し、その当時の風潮にマッチしてヒットしたもののだが、続いてロシア民謡「セントペテルスブルグへの途中<sup>3</sup>にて」の大作に仕事熱心な石丸寛氏を中心にグリークラブのメンバーは一丸となり、完成に心身共に傾注し、同年十一月三十日、八幡市安川電機同和会堂で行なわれた第二回朝日合唱コンクールに優勝した。課題曲はシューベルト作曲「夜」自由<sup>4</sup>は「セントペテルスブルグへの途上にて」であった。二位は第五高等学校五高フライエ・クンスト、三位は福岡高等学校音楽部であった。第二回朝日合唱コンクールの模様を後藤照男氏（昭和二十三年卒）は日記に次のように書いている。

<sup>3</sup> 原文のママ：途上？

<sup>4</sup> 原文のママ：曲？

昭和二十二年十一月三十日 晴

今日はまさしく退くことも逃避することも出来ない第二回合唱コンクールの本戦だ。昨夜の時雨もどうやら上がったらしく、すがすがしい朝だ。ハッとと思って床よりはね起き雨戸を開く。戸外は未だ黑暗につつまれている。遠くよりは、もはや市電の音が轟いてくる。見渡せば東の空か静寂の中に白けて行く絶好の日和だ。コンディションもよく、朝食を済まして唐人町の停留<sup>5</sup>所へと急いだ。行って見ると、やはり本日出演する県立の女学生らしく、寒さにふるえて電車を待っている。朝が早いせいか、まだ勤め人も少ない。博多駅に着き降りて行くと、交声会やハーモニックの諸氏や女学生が既に来ている。改札の列に並んで楽しそうに談笑している。グリークラブの連中はまだ渡辺と岡田の二人しか来ていない。皆は何と悠然と構えているものか。二十分前になってやっと人員が揃った、さすがは優勝候補のグリークラブだけあって落ち着き払ったものだ。強敵福岡高等学校の連中もマントをひっかけて数人屯し、白線帽も今日は特にしゃくに障って見えた。間もなく改札をして列車に乗り込む。途中、車内ではグリーの連中と席を対し、近頃流行の「甘の扉」をして楽しみながら行く。各団体の人達も如呵にも楽しそうに笑い興じている。意外に時間もたって黒崎に下車す。

駅前で一応隊を整えて石丸さんを囲みつつ威風常々と安川電気の講堂へと向う。途中数分にて到着す。もう既に講堂附近には大勢の人の集まりだ。胸中いささか不安と焦燥にて心臓のときめきを覚ゆ。中でも偶然にも旧友の日田出身生野君と同じく日田人の七高の梶原君と出逢う。彼は七高の合唱団の一員で遙々鹿児島より遠征して来たとの由。今日は互いに覇を争うものかと笑い興じる。間もなく愈々演奏が始まった。場内も緊張そのものだ。最初は女声合唱（女学校の部）で中津高女の演奏にて花々しく決勝戦の幕は切って落された。さすがに各県代表チームだけあって何れも劣らぬ技倆と演奏ぶりだ。横にかけている石丸さんと共に感心ながら聞く。やがて福岡のミッションが始まった。最初の中はハーモニーもとれてきれいであったが、後になるにつれてソプラノの音程が狂って来たのかハーモニーがくずれて来たのは素人の僕にもうなずかれた。而して優勝候補のミッションへの期待は、むざんにも破られ、気の毒にもまずい演奏に終わったのは何としても心惜しかった。続いて午後には愈々男声合唱が始まった。五高、福高何れも意外によく唱い、グリークラブも最善をつくして唱ったつもりだったけれども、最後の福高の演奏を聞いて初めて、今度はやられたとグリーの諸君（自分もだが）皆すっかり気を挫かれて、しょんぼりとしていた。そして審査の発表の終るまで、てっきり負けたものと諦めていたのだったが、豈計らんや発表によるとグリークラブが男声では第一位ではないか「西南学院」と委員長が言った時、場内はワーッと歓声が挙り、グリーの連中は皆我れを忘れて喜こんだ。あの時ほど嬉しく感じたのは第一回コンクール予選の時以来の感激で、自分も熱狂のあまり手の掌がはれんばかりに拍手をして喜こんだのであった。而もあの時ほど名誉と学生の意気に感じたことは以前には一度もなかったのである。あの時の瞬間の緊張と感激、胸のときめきこそ小生の一生忘れることの出来ない印象として心の奥に刻まれたのである。ところが我々の直ぐ前に席を取っているミッションは、入賞していなかったのが気の弱い女学生達にはよほど強く心を打たれたのであろう、みな頭を下げて、中にはくやしきのあまり泣いている者さえある。実に気の毒だ。さぞかし残念であったことであろう。しかしこの結果も各自の責任なるが故に何とも致し方なし。次期コンクールを期さなくては……と同情と憐れみとを感じたのであった。そして栄冠を獲得せし興奮と愉悦に浸されつつ帰りの車中も楽しく唱いながら、夜のうす暗い博多駅のプラットホームに降りたのである」……と。又、ライラック合唱団とベートーヴェンの第九を合同演奏

<sup>5</sup> 「留」原文置き換え

した。当時グリークラブの有志だけはライラック合唱団に所属し、後に石丸寛氏主催のフィルハーモニック・ソサィティに所属して演奏活動を行ない、又、西南女学院や福岡女学院とは記念祭やクリスマスに交換演奏会を行っていた。当時の合唱界をみると、戦後、合唱はオーケストラなどよりも一足さきに復興の動きをみせ、昭和二十一年ライラック合唱団復活二十二年には森脇憲三氏が新たに福岡交声会という合唱団を作った。その幹事は西南学院グリークラブ出身の鶴原大郎氏だった。又、当時の音楽界をみると、この年に西鉄文化会が生まれ、諏訪根自子を皮切りに次々に多彩な演奏家を九州に招き、音楽に飢えたファンを喜ばせた。日響、東京フィルを招いたのもこの会であった。

辻久子、三宅春恵、原智恵子等を招き演奏会を主催しているが、戦後の混乱期にこの会が飢えた人々に音楽を与えた功績は大きい。又、当時ライラック合唱団の松本省一氏等がやっていた福岡音楽協会や九大の学生等による福岡音楽同好会などがあって、梶原完のピアノ演年奏会（二十二月九大医学部講堂）、大谷冽子、高木東六ジョイント・リサイクル（同九月）、クロイツァーピアノ演奏会（同十月）、井口基成ピアノ演奏会（二十三年十二月）、各々九人医学部講堂にて開いている。久留米市でも音楽協会、音楽愛好会が二十二年から二十三年にかけてつくられており、諏訪、三宅、原あるいは永井進、モギレクスキー等の演奏会を開いている。

## 低迷時代

### <昭和二十三年>

昭和二十三年二月四日グリーメン（グリークラブ部報）第一号が発行された。当然<sup>6</sup>グリークラブの部長であった藤井泰一郎先生は次のような言葉を発刊の辞としてグリーメン第一号に書かれている。「発刊の辞」先日チャペルでL・S・ルイスの新著について一寸話したが、彼が新しい基督教道徳を説いたその本の中に用いた比喻をもう一度繰り返すと、彼は人類を一つの楽団に譬え、それがよい音楽を奏するためには二つのことが是非必要である。それには先ず、各人の楽器の調子が正しいこと。次に各人が全体と正しい調子を合わせることである、と言い、この二つのことは誰でも一応了解しているが、それだけでは不十分で、その楽団が楽しい舞曲を演奏することを求められている時、死の行進曲でも演奏しようものなら全く台無しで、とんでもないことになってしまう。つまり、はっきりした目的を自覚していなければ道徳も不完全である、と説いたものであろう。我々のグリークラブでもそのメンバーが皆仲良く互いに相親しみ、楽しく調子正しく歌い、再度のコンクール優勝、その他近來かつて無いほどの好成績を収め、大いに学院の名誉をあげているのは全く嬉しいことである。然しこの上、なおメンバー各自の学生生活を充実さして行くためには単におもしろおかしく歌うに止まらず、もっとはっきりした目的を更に自覚して、何時も研究的態度を失わぬということも又大切なことである。そのため本誌の如きものが編まれて、お互いの理解親睦のみならず、深く芸術を愛する心が養われてゆくことは実に幸せなことである。理想の国へ旅するものは目に夢を見、耳に声を聞き、手に剣を握って進まねばならぬが、更に大切なことは心に歌を抱いて行かねばならぬという。この小誌が伸びゆく若き諸君のうた心の糧ともなれば、その目的は達し得たものと言えよう」と書かれているし、又、当時の指揮者であった石丸寛氏が「愛する合唱の友よ」という題で次のように書かれている。

「愛する合唱の友だちよ！歌を唄うことによってお互いの間に人生の緑を、その中を広々と走ってい

<sup>6</sup> 原文のママ

るオレンジ色の道を、それ等を共有したる最愛なる友たちよ！私達は苦しまなかった。苦しみが例えば美しい糸を巻かれることによってますます見えなくなっていくように底に沈んでしまったのだ。君達は「おき上がりこぼし」という歌を知っているだろうか？「帆綱は唄うよ」と同じく二部合唱曲であるが、多分、何人かの三年生を除いて、これらの曲は糸巻きに最初に巻かれた美しい一すじなのだ。糸巻きは今では膨張している。今では君達も音楽に携らしめるに殆んど十分な量の糸がそこには巻かれている。君達の殆んど人は謙譲であった。西部日本において最も勝れたる男声合唱団たるの荣誉が君達を一体どれほど喜ばせることが出来たであろう。又、これらの人達の何人かは真にクラブのために努力した。誰もこの輝かしい男声合唱団の柔軟性に富んだ団結の雰囲気や疑うことは出来なかったであろう。私並びに数多くの人の信ずる通り、君達グリークラブは、その名に最もふさわしい存在として二カ年を送ったのである。そしてこの事実は君達により深い使命と責任とを与えなければならない。自由なる精神の萌芽が一切の圧迫と妨害を免れた今日、私は常に思うのであるが、西南学院の如くミッション制によって自由なる精神を擁護されて来た学校の伸展、成長にかかる責任は大きいのである。そして、この責任は音楽という根本的に自由主義なる芸術に携わっている君達に於いて十分に重大な問題であらねばならぬ。文化国家たるの宣言をする必要を君達は認めただろう。文化なる語が芸術、宗教、教育、健康、交通、政治に至るまでの凡そ国家成立のための一切の要素を裏付けする根本的な精神内容であることを思えば、私達の国に限らず完全な文化こそが国の必然的な願望であり、高尚な精神こそが国家価値を定めるものである。西南学院は恵まれたる精神の自由を与えられている。君達の西新町の母校は文化国家の価値を計画されるべく存在しているのだ。君達の精神は、知性は、ただに大学を作るのみならず国家を私達日本人自身を作るのである。私はグリークラブの中に日本を夢見ている文化知性の磨かれた美しい国を夢見る時、今日までの君達の、私達の耕育した花園は少なくとも来るべき大果樹園のほんの礎たらねばならぬ。……と。

又、この昭和二十三年は、グリークラブの復活以来、ひたすらクラブの発展のために努力した三年生の卒業と共に、常にグリーメンを激励し、熱烈な指導を惜しまなかった石丸寛氏がクラブの指揮を止めるといった将に重大な試練に直面した年である。」とも記してある。

朝日合唱コンクールも例年通り行なわれたが、この第三回コンクールは山口県の宇部渡辺翁記念館で行なわれ、課題曲は「秋のピエロ」、自由曲は「伝説旧カールガ街道の奇蹟」（ロシア民謡）であった。全員、懸命な演奏であったが、県立福岡女子高校（現福岡中央高校）指揮米倉美枝女史の「水とんぼ」に優勝を譲ってしまった。しかしこの時の「水とんぼ」は確かに立派な演奏であった。その頃より指揮者石丸寛氏は自己の創作意欲はコーラスに留<sup>7</sup>まらず広くシンホニーの域にあることを見出し、日々研究に余念がなかったし、又、美術方面にもその意欲を見せ、芸術家としての彼は大きな障碍に直面し苦悩していた。やがて西南グリーは指揮者を自分達の中から選び、自分達で合唱を築いていく時が到来した。このことに対して、林照樹氏（昭和二十四年卒）は「ここに本来の西南グリークラブの歴史があり、輝かしい伝統があるのであって、未知なるもの、秀れたものに対する学生の本領を發揮してゆくべきである。得難い指揮者の一人、石丸寛氏より戦後西南グリーが吸収した多くの何かは、きっと現在のグリーメンの中に生きているはずであると思っている。」と語っている。当時、福岡の音楽界においては、九大コーロステロラも復活した。指揮は安永武一郎氏（現九州交響楽団常任指揮者）が受持った。同じ年、石丸寛氏は戦後参加していたライラック合唱団をとび出し、フィルハーモニック・ソサエティーを創設

7 「留」に置き換え

している。また西南学院出身者を中心に西南カレッジエート・ココーラル・ソサエティーも生まれてい  
たし、九大の学生を中心にコール・オルフォイスという合唱団も生まれていた。

## 転換期

### <昭和二十四年>

昭和二十四年を迎えて、グリークラブも再建後もう四年という月日を送った。戦後、数人の学生を中  
心に復活したグリークラブが、二部合唱からはじまり、「おきあがりこぼし」のような歌を歌いつつ、よ  
り高度の音楽へと情熱をもやしたが、楽譜もよめない学生だけでは高度な四部合唱は無理な話であった。  
そこへ石丸寛氏を指揮者として迎え、専門<sup>8</sup>の指揮者から合唱の技術を吸収していった。何も音楽に関す  
る知識を持っていない学生にとって、それはどんなに苦しいものであったか——。そしてその努力の結  
晶が「カチューシャ」での合唱コンクール優勝の喜びであった。このように先輩や学生や石丸寛氏を  
中心として、苦しい中にも平凡に楽しく石丸寛氏の忠告や技術を吸収してきたグリークラブは、戦前  
の実力にまで復活したのであるが、昨年から石丸氏が自分の芸術に対する欲望の実現のためにグリーク  
ラブの指揮をやめたためグリークラブは与えられた、すべての技術、知識を、自分達の中から選んだ学  
生の指揮者を中心として発揮しなければならない時期が到来したのである。今まで専門<sup>9</sup>の指揮者の指導に  
たよっていたグリーメンはこの学生の指揮を中心としてどんなに苦しんだことか——。しかし、グリー  
クラブの歌う熱意は、ますます盛んになって行き、部員も次第に多くなって行った。数人集まっては校  
庭の松の木の影などで歌ったものだった。又、開学記念日、文化祭、チャペル・サービス、そして例年



ミス・グレイブス宅にて

のように、日田、筑後地方へ演奏旅行に行った。この旅行  
も毎年盛んになっていくようであった。乗物の中でも愉快  
に楽しく時間を送ったものだった。十二月にはクリスマ  
ス・コンサート。内容はやはり讃美歌が多かった。このよ  
うに転換期を迎えながらもグリークラブは部活動を盛んに  
していった。このような部活動以外にも、部員で志賀島に  
ピクニックに行き、歌ったり食べたりで青春を楽しんだり  
した。又、クリスマスにはグレイブス教授の家に遊びに行  
き、西南女学院の学生と共にイエス・キリストの降誕を祝  
ったこともあった。学内の活動以外にも、太郎劇場で進藤

邦彦の指揮で歌ったり、一月三十日には、九大医学部講堂で福岡県立福岡女子高等学校全国合唱コンク  
ール優勝記念の合唱音楽会にも出演した。しかし、何ととってもグリークラブのメンバーが最高の努力  
を発揮するのは毎年秋に行なわれている朝日合唱コンクールであろう。この年も十月三十日、九時三十  
分から九大医学部で行なわれたが、課題曲はメンデルスゾーンの「悦ばしき逍遥の人」であった。又、  
自由曲は「ああ、この良夜」であった。発表の結果、昨年は優勝を福岡県立女子高校にとられたが、こ  
の年は再び優勝の栄冠を勝ちとった。二位は山口大学メンネルコール、三位は山口女専であった。この  
コンクールの時の写真を見ると、中央の秋根氏（昭和二十五年卒）だけが白いシャツ一枚で写っている。

<sup>8</sup> 原文のママ：専門？

<sup>9</sup> 原文のママ：専門？

これは、秋根氏が水遊びをしていた時に水の中に落ち込み、学生服をぬらしてしまったためだ。黒い学生服の中でこの白シャツは、いやに目にとまる。恐らく忘れられない思い出となることだろう。しかし、グリークラブにとって一番難点なのは、やっと実力がついて来た頃に学院を卒業して行くことだ。在学生はもっと先輩が歌ってくれたらと卒業を悲しみ、卒業して行くグリーメンも、もっとグリークラブの中で歌いたいと言いながら卒業していったものだ。このように、卒業していくグリーメンはグリークラブに愛情を抱いていた。このような状態を毎年くりかえしながらいよいよ昭和二十五年を迎えるのである。

## 低迷から躍進へ

### <昭和二十五年>

学生指揮者になってから二年目。いよいよ指揮にもなれてきた学生棒ふりはますます情熱を傾けていった。この年の三月、学院始まって以来最大の、いや日本中でも最高の音楽会が九大ホールで開かれた。これが有名な「西南グラウンド・コンサート」である。プログラムは写真（後載・福永氏の回顧録の項）のようなものであった。プログラムも今までのものにくらべれば豪華なものであった。片面には英語で、一方には日本語である。出演者は石丸寛氏、福永陽一郎氏、福永愿子氏、毛屋禎吉氏、その他の豪華メンバーであった。福永陽一郎氏は当時のことを次のように述べている。「グリークラブは指揮石丸寛氏にピアノが私という組み合わせで、進藤邦彦、毛屋禎吉といった豪華な顔ぶれで演奏をしたものです。他に現在毛屋夫人、立野サトさんは立派なコンサート・ピアニストでしたし、私の亡くなった妹はソプラノ歌手でした。前にも後にも一回きりだった「セイナン・グラウンドコンサート」はこの顔ぶれを総動員したのですが、そのプログラムの内容の豊富さは、今でも西南学院は勿論、日本中のどんなに音楽の盛んな大学でも望めないほどのゼイタクなものです。又、私の亡妹を主役に、進藤のピンカートン、毛屋のシャープレスで演奏した「お蝶夫人」は文化祭の聴衆の紅涙をしぼりました（これはほぼ完全な全曲演奏でした）」と語っている。

秋には第五回目の朝日合唱コンクールが行なわれた。時は十一月十二日、午前九時からであった。場所は九大医学部中央講堂課題曲は「秋の日暮」、自由曲はグリークラブの得意のロシア民謡「ロシアの遠足」であった。メンバーはグラウンド・コンサートで素晴らしい演奏をした面々。指揮は石丸寛氏、伴奏は福永陽一郎氏であった。満員の会場の聴衆は西南グリークラブに期待していたのか、西南がステージに上がると割れるような拍手を送った。グリーはステージに上がると、サッとまるくなり、指揮者の登場を待った。好調な出だしであった。特製のロシア民謡は聴衆の心をとらえた。歌い終わった時の拍手は、ステージに上がった時の拍手の二倍もあったようだ。グリーメンはこの時、「勝つたな」と思った。発表の結果やはり西南グリークラブの優勝、二位は山口大学男声合唱団、三位は鹿児島大学音楽部であった。この発表の後、外の庭で石丸寛氏、福永陽一郎氏をかこんで歓声を上げたのは当然のことであった。

このように、この年は昨年ひきつづいて最高の演奏会を開くことが出来たのであった学生達の喜び、石丸寛氏、福永陽一郎氏等の愛情は、「西南グラウンド・コンサート」、「コンクール」を通じて学生の心にうえつけられた。このようなグリーに対する心からの愛情は、グリークラブの発展にどれほど寄与したか筆紙に尽しがたい。これらの愛情がグリーの黄金時代への道標になったということは過言ではあるまい。

## 回顧録

石田 昭

一般に懐旧と云うことはセンチメントであれリアルであれ、聞かされる方にとっては冗長で凡そ退屈なものである。然し古代の歴史が語部によって語り継がれ、神話としての記録が人々の魂の故郷として歴史的発展の本源としての崇高ささえを以って受け継がれたものの血に臨み、その原始的純粹さは同じ流れの人々にとって美しい憧憬の対象として残ってゆくことも否めないだろう。グリー復活の時代は福岡は焦土と瓦礫の街だった。そしてグリーメンが歩き続けた道が、やがてはこの街が合唱の街と云う緑に包まれた街に変貌していった道に通じるものだった。現在の如く合唱界に覇を誇るグリーにとって他の合唱団は既に群小の観があるだろうか。当時の福岡に於いては男声合唱団は福高とグリーだけだった。演奏会用の借着ながら黒の紳士然たる制服と、文字通り弊衣破帽、高下駄、黒マントの彼等とは相互いに戦国武将の如き畏敬と友情、或いは少年の如き恋を抱いていたものだった。グリー復活の大ロマン時代の本当に素朴な美しいライバルだった。苦しいことばかり多かったようだが、又、古き良き時代の滋味爽やかな思い出に包まれているとも云えよう。福高が「トルコ酒場の歌」を探してくれば、グリーは「カチューシャ」で応じ、グリーが「セントペテルス」を持ち出すと、彼等は「夜鶯」。彼等がお家芸の独乙語を操ってくれば、西南は得意の英語で一歩も譲らず、将に伯仲、両者の激突は合唱界の圧巻だった。然し神話に於ける如く、模糊たるものが生成形造られて国が出現したように、グリーの復活もカタストロフ的突然変異によって忽然と出現し、終戦の大詔を受けて直ぐに「カチューシャ」を歌ったものでもなく、現在のグリーメンの方々にとっては既に伝説的語り草となっている、男声二部「オキアガリコボシ」という原始的生みの苦しみ的一幕があったのである。「オキアガリコボシ」から「カチューシャ」までの長い道も、グリー開幕の序曲として一応埋められねばならないだろう。それは単なる事実でしかないにしても。

(筆者は昭和二十二年旧制専門学校経済科卒・グリーOB・福岡相互銀行本店勤務)

## 美しい五月

木村 正昭

五月は美しい月です。桜の花は過ぎましたが、花屋の店先には色々な花が目もさめるように街を明るく色どっています。天気の良い日に散歩でもすれば小唄の一つも口をついて出ようというもの。フランスの唄に「すずらん祭り」というのがあります。とうとう来日がオジャンになりましたが、モンタンの主演した同名の映画の主題歌ですが、美しいワルツです。原題は「プルミエ・メ」、つまり五月一日。この日は労働者のお祭りですが、日本と違うところは、街中すずらんの花で満たされることです。この日は誰でも特別の許可なしに、街ですずらんを売ってよいので、いたる所で小さな花束にしたすずらんを

二十フラン（約二十円）か三十フランで売っています、そして人々は、今日はすずらんの日だからというので、胸にすずらの花をつけ、又、お互いにすずらの花を上げたり、もらったりします。街中はすずらの良い匂いで満ちます。五月一日は平和の日なのです。そして、すずらはしあわせの花。この日からバリーの春は始まります。パッと青葉が香って、いっぺんに良い気候になるのです。僕がバリーにいた頃は……眉にツバをつけて下さい。悪かったですね、こりゃあ。

このごろはどうなっているか知りませんが、この季節の平尾は素適でした。グリーの連中と一日ハイキングに行きました。近くだし手頃の場所ですから。もうすでに女声部もありましたから色どりも華やかに、女の子は食べ物好きですから食べものも楽しく、新緑の平尾を唄い歩いたものです。あの頃は一日歩きまわっても、青葉に包まれてきれいな小川ではセリなどもつむことが出来ました。一行二十人位だったかな。今とくらべて小人数ですから気軽にどこへ<sup>10</sup>でも行きました。面白かったのが進駐軍のキャンプ慰問。学生ですからノー・ギャラ。その代りに食事やお茶が出ます。これが豪勢なもので、戦中、戦後の粗食に慣らされた我々にとっては特に目のさめるようなご馳走でした。大きなアルミの仕切り盆を銘々が持ってセルフサービス。その盆が見る見るうちに色んなご馳走で一杯。パンの厚さと同じ程の厚さのチーズのサンドウィッチをパクつきながら、こりゃあ日本も負けるはずだな、なんて思ったり、食後のケーキとアイスクリームの美味しさも格別。満腹したところで本番。「ウボイ・ウボイ」「ふるさと」「野ばら」等よく唄いました。キャンプ内のスティーム暖房も不慣れなせいで、のぼせ上がって声が出なくなったような気になり、石丸さんに叱られました。民間人は入れませんので、誰かの学生服を借りてヒネタ石丸学生が棒を振り振り唄っていました。かならず迎えのバスかトラックが来ましたから、それに乗って往復、行きは演奏に差仕えてはというので神妙にだんまり、帰りはご馳走で腹は一杯、先の心配もなしで陽気に唄い続けました。夜の博多湾を右に見て、その向うに博多の街の灯のチラホラするのを眺めながら、肩を組み合い、バスにゆられて唄い続けました。クリスマスには大変なもので、あちらこちらの御座敷からお声が掛って、ちょいとしたタレント。クワルテットで行ったこともあります。トップから小生、毛屋君、林君、長君（弟）。毛屋君とい<sup>11</sup>面白い思い出があります。先ず彼の入部の一駒。今日は新入部員が来る日というので、あの赤煉瓦の講堂に行くと、隅っこにつつましやかに一人の見覚えのある顔。さる日、九大講堂（当時最高の音楽会場）の森脇先生の御弟子さん達の発表会で、しんがりに唄っていた顔。「あなた、グリーに入るんですか？」「はい。入れて戴けますか」「へー、本当に入ってくれるんですか。こりゃ驚いた。おい、この人はこれこれしかじか……」というわけで鬼の首でも取ったように喜こんだものです。今をときめくフォーコインズのリーダー。解らないものですね。彼、ヴァイオリンを少々たしなみます。僕も少々。そこである日、二人で芸術をいたそうと、放課後の一室でシューベルトのヴァイオリン二重奏曲なんぞを颯々と百道の松林に響きわたらせました。今、その松林には立派な鉄筋校舎が建っているそうですね。あの赤煉瓦の講堂はどうなりましたか。グリーの練習所でした。ピアノがここしかなかったので、他のクラブとがちあったり、ピアノ確保に苦労しました。しかし練習は楽しいばかり。さぼる人の気が知れませんでした。メンバーが集まっても集らなくても、メロディーであろうがなかろうが、むしろ旋律につける方が音楽的スリルがあって面白い。僕は名セカンド（お許しを）でした。実際、僕は音楽好きでした。クラシックからジャズまで、良いものは何でも好き。それが職業となると苦しいですね。色んなことで。だから僕の美しい五月は、あの赤煉瓦のツタ

---

<sup>10</sup> 原文のママ

<sup>11</sup> 原文のママ

の葉蔭に今でも歌い続けています。人生の五月を。

(筆者は昭和二十四年旧制専門学校経済科卒・グリーOB・シャンソン歌手)

## 全日本合唱コンクール初出場

### <昭和二十六年>

この年は飛躍のための準備の年であった。関西学院グリークラブとの交歓を通して得た技術の向上、日帰のセミ演奏旅行、総ては翌年の開花につながる大切な種子であった。又、コンクールに於いて大学の部が独立する等、ある面では幸運な年でもあった。

この年で特筆しなければならないことは、カレッジ・ソング“Ah Seinan”と“*She wants brave noble man*<sup>12</sup>”が出来上がったことだろう。これはミス・グレーブスの詩に石丸寛氏が作曲されたもので、以来グリークラブの徴しとして親しまれ愛され、且つ好評を博している曲である。

第六回合唱祭は六月三日、九州大学医学部講堂に於いて開催された、西南学院グリークラブは進藤邦彦氏の指揮で“*Lord I want to be a christian*<sup>13</sup>”等、二曲の黒人霊歌を唱った。演奏は出演団体中ずばぬけて立派だった。

昨年始まった関西学院との交歓演奏会はこの年で二回を数え、七月七日、福岡女学院講堂で開かれた。エールの交歓の後、関西学院グリークラブはグノー作曲“*Second Mass in G*”等三ステージ、西南学院グリークラブもロシア民謡等三ステージを受け持った。両グリークラブとも出来は素晴らしく、非常に好評であった。

十一日からグリークラブとしては新しい試みの演奏旅行に出ることになった。その初日は八幡高校、十二日東筑高校、十四日柳川の伝習館高校、十五日唐津高校等、福岡市の周辺だった。これは、この演奏旅行なるものが本格的なものでなく、連日、日帰りのものだったからである。しかし、このことは後日の本格的な九州一周の演奏旅行につながる、いわば試石のような存在であるため、その意義は大きいと言わねばなるまい。

西部合唱コンクール福岡予選は、十月二十一日、九州大学医学部講堂に於いて行なわれた。従来は高校、大学の部として一校を代表に選んでいたのであるが、この年より大学の部が独立することとなった。出演校は西南学院グリークラブのみであった。指揮は進藤邦彦氏、課題曲「山の朝」、自由曲は清水脩作曲「月光とピエロ」より「月夜」であった。

十月二十七日、熊本市尚綱<sup>14</sup>高校に於いて第六回西部合唱コンクールが開催された。

演奏は非常に良く、審査員の米倉美枝氏より、“久し振りに綺麗な男声合唱を聞いた”とのお褒めの言葉をいただいた。審査の結果は勿論一位で永年の宿望を達した。

第四回全日本合唱コンクールは十一月三日、東京日比谷公会堂で行なわれた。全員緊張しすぎたためか、ピアノの音を聞かずに唱い出し、初出場とはいえ、五位という予想外の辛酸をなめなければならなかった。

十二月二十一日、西南学院高等学校講堂に於いて、板付空軍男声合唱団と共にクリスマス・チャペル

<sup>12</sup> 原文のママ：men？

<sup>13</sup> 原文のママ：Christian？

<sup>14</sup> 「綱」置き換え

に出演した。板付空軍男声合唱団の演奏は「バーバーショップ」を唱ったカルテットの他は大した出来ではなかったが、グリークラブはクリスマス・ソングを唱い、かなりの好評をうけた。なお、指揮は内海敬三氏であった。

## 躍 進

### <昭和二十七年>

いかなる意味においても、この年はグリークラブにとって記念すべき年であった。戦後いち早く胎動を始めた小さな芽は、ここでついにその開花を見るに至るのである。他の合唱団との交歓演奏会、合唱祭、コンクール、クリスマスの音楽会等と活動を続けて来たグリークラブは増々そのレパートリーをひろげ、ついに戦後第一回の独立演奏会を開くことが出来るようにまで成長したのである。即ち六月一日、石丸寛、内海敬三両氏の指揮で賛助出演にアルトの進藤梅子女史（編註 進藤邦彦氏の姉上）、中央高校声友会、福岡放送絃楽四重奏団（現九州交響楽団）を迎えて、電気ホールで盛大に開かれたわけである。プログラムは、絃楽四重奏、独唱、四重唱と多彩を極めたもので、第一部、黒人霊歌、男声四重唱、アルト独唱、声友会とグリークラブの混声合唱によるロシア民謡、第二部、バーバーショップ、絃楽四重奏曲、アルトと男声合唱による合同演奏であった。音楽会の少なかった当時に於いて常に喜ばれ、定評のあった「黒人霊歌」はさらに好評を博した。

その感想を当時のグリークラブ日誌から拾ってみよう。「OBの人々も六、七名参加され多難な毎日の練習ではあったが、晴れの今日の日を夢に描きつつ猛練習した甲斐があり大体において成功した。ここに改めて委員の人々の努力に対し感謝の意を表したい。演奏会終了後、石丸氏や進藤女史、米倉先生、それに声友会と西南グリー全員、ティールーム「モリナガ」において和気あいあいと話し合った。混声合唱が非常に良かったとか、「黒人霊歌」の中の“ジェリコ”等は、昔のグリーが吠えていたあの華かさを思い出させたとか、幕の開く前の“Ah! Seinan”は丁度レコードでも聞いているかのようなようだったとか良い批評ばかりを耳にしたが、自分は今日の目的であるところの男声合唱の重味のあるハーモニーは完全に出てなかったと思うし、又、確かにバーバーショップの曲は不成功であったと思う。西南グリーばかりでなく、日本人にはやはりこの曲は不向きであるということをつくづく体験したし、反面よい勉強になった。これこそ今日の最大の収穫の一つであったろう。」

六月十五日、第七回合唱祭が電気ホールで二十四団体参加の下に行なわれた。グリークラブは「黒人霊歌」の“Lord I want to be a Christian”とシベリウスの“A song of peace”を歌った。

世に言論弾圧の再来だといわれた破壊活動防止法案が国会に出されたのもこの頃のこと、デモに参加するために練習が欠けたることもあったが、六月二十日の電気ホールでの開学記念祭はまず無事に済ますことが出来た。

独立演奏会で好評を博し自信を得たグリークラブの活動は、名マネージャー野上芳五郎氏の腕と相まって、本格的な演奏旅行へと結びついた。七月十一日に小城高校及び同中学、十二日大牟田北高校及び三池染料講堂、十三日八代袋町公民館、十四日鹿児島大学フロイデコールとの交歓を鹿児島中央公民館で、十五日宮崎教育会館、十六日大分教育会館、十七日東筑高校、十八日水巻町机クラブ、と行く先々で好評を博し、色々エピソードを生んだのだが、中でも宮崎でのことは今でもグリーメンの語り草になっている。当時の模様を武立氏は「大変な盛況で、我々の演奏も又それに応えるだけの演奏はしたつも

りでした。最後の曲が終ると、たちまちアンコールの声がかかり、それに応えて、皆様方もよくご存知のチェコスロバキヤ民謡の“ウ・ボーイ”を声も高らかに歌い、宮崎での演奏会を終ったのですが、演奏が終って聴衆が帰りかけた時に、一人の外国人が我々の所にやって来て、『私はチェコスロバキヤ人で宣教師として宮崎へ来ている。今夜はたまたま西南学院のコンサートを聞かせてもらったわけがだ、中でもアンコールで歌った“ウ・ボーイ”は私の国の民謡で、とても懐しく、感激しました』と云われて、一同も又感激しました。」

指揮が内海敬三氏に代わってからの初めてのコンクールは、十月二十六日、電気ホールで開かれた。課観曲は“野はうるわし”自由曲は“O Sacrum convivium”であった。快調なすべりだしで十一月二日の長崎での西部合唱コンクールへと駒を進めた。会場は長崎東校。当日は晴天に恵まれ、強い自信を持って発表を待った。結果は予想にたがわず、グリークラブが広島女学院、そして、奇しくも同じ自由曲を歌った山口大学メンネルコールを抑えて覇権を獲得した。

全日本合唱コンクールは、十一月二十三日、中之島公会堂で開かれた。前年のコンクールで辛酸をなめたグリークラブは、慎重の上にも慎重を期して大会に臨み、日頃の練習を十分に発揮し、待望の初入賞をはたした。その時の感激を日誌に見てみよう。

『ようやく審査の発表、時まさに四時四十分！結果は何て出るだろ？一位関西学院グリークラブ、二位横浜国立大学グリークラブ、三位西南学院グリークラブ。三位人賞！すぐ公会堂の前に集合し“Ah! Seinan”“いくさ人”を合唱す。そして思い出すともなく思い起されるのは、日比谷の夕暮れ。辛かったことよ！こそこそと淋しい気持で旅館へひきあげた昔き<sup>15</sup>思い出も、今日の喜びが療してくれる。』

コンクールが終るとステージおさめのクリスマスのシーズンとなる。Skyline club, Shooting Star Club 等米軍慰問を済ませ、十二月二十三日の高校の講堂で行なわれた大学クリスマス祝会で、宗教曲、黒人霊歌を歌い、二十七年度におけるグリークラブの行事をすべて終わった。

この年をふりかえてみると、第一回独立演奏会、そして初めての演奏旅行、全国大会において初めての入賞など輝やかな業績を残したのであるが、このことに関して忘れてならないことは、野上芳五郎氏の努力であろう。独立演奏会を企画し成功させたのは氏であり、又、前述の如く演奏旅行を実現せしめたのもまた野上氏であった。後年におけるグリークラブの活動を考える時に、忘れてならないのはこの野上氏の功績であろう。

## 全盛時代

### <昭和二十八年>

この年は、長弘氏、西脇吉周氏等優秀なメンバー九名が卒業し打撃をうけたが、前年に引き続き全国コンクールに入賞する等多彩な年であった。

恒例の関西学院グリークラブとの交歓演奏会は、二月二十五日、福岡女学院講堂で行なわれた。西南学院グリークラブは内海敬三氏の指揮で「黒人霊歌集」を唱ったが練習不足のためあまり振わなかった。

六月二日、板付ベースにおいてアメリカン・ハイスクールの卒業式に出て演奏した。演奏はあまり芳ばしくなかったが非常に珍しい経験であった。

<sup>15</sup> 原文のママ

第二回独立演奏会は、六月二十七日、電気ホールで行なわれる予定であったが、台風のため三十日に延期された。又、このために賛助出演の予定であった西南女学院短期大学合唱団は参加することが出来なかった。

指揮は石丸寛、内海敬三の両氏、独唱、進藤梅子氏、伴奏、佐藤博子氏であった。プログラムは、第一部最初のステージは“月光とピエロ”より「月夜」「ピエロの嘆き」それに清水脩訳詩「冬のセレナーデ」。次はOB有志による「懐しいグリーの歌四曲」、アルト独唱でビゼーの「Agnus Dei」等三曲。再びグリーの演奏で「聖歌」。第二部はOBと共に「ロシア民謡集」、次に女声合唱でシューベルト作曲「ワルツ狂想曲」の予定であったが、西南女学院が不参加のため出来ず、最後はアルトと男声合唱で「歌の翼に」等五曲を演奏した。

ロシア民謡が比較的好評であったとはいえ、水害の打撃と連日の猛練習で気迫のない演奏であった。

演奏旅行は七月十日の日炭机クラブホールを振り出しに、十一日は西南女学院講堂。演奏旅行初めての本州入りは、十二日に山口大学講堂において山口大学メンネルコール、山口女子大学合唱団との交歓、十三日には八幡労働会館で八幡市民合唱団と交歓、十四日から十六日まで別府の日炭保養所で休養をとった。その最後の日、連日の猛暑で疲れ、全員ぐっすり寝こんだところを泥棒にカメラを始め学生証に至るまで、ゴッソリ盗られてしまった。被害のあったのはバリトンだけだったが、警察の調べ等手続きの関係で、翌日、大分の昼の部の演奏会はバリトンは二人という状態だった。

夜の部は大分教育会館で大分大学合唱団と交換<sup>16</sup>、十八日は宮崎教育会館において昼夜二回の演奏、十九日は青島を見学し、二十日に鹿児島鶴丸高校で鹿児島大学フロイデコールと“月光とピエロ”の交歓演奏をした。二十一日は八代公民館、二十二日は三井三池染料講堂、三十日<sup>17</sup>は長崎東高等学校で昼夜二回の演奏、夜の部は長崎合唱団との交歓、二十四日の最終日は佐賀高等学校と交歓、好評のうちに演奏旅行を終わった。

この年の委員改選は九月十一日、ニッポンビールで行なわれた。この結果、マネージャーには植本陽一郎氏、コンダクターには無競争で小島八郎氏がそれぞれ選ばれ、コンクールから活躍することとなった。

修養会という名目のコンクール強化合宿は十月十四日から十七日まで干隈修養場で行なわれた。これは初めての試みであったが、技術的にも精神的にも有意義な集いであった。又、自由曲は石丸寛氏編曲“カルーガ街道の奇蹟”と決定、課題曲は清水脩作曲“海”であった。

西部合唱コンクール福岡予選は、十八日、電気ホールにおいて開催、大学の部には福岡学芸大学合唱団と西南学院グリークラブの二団体が参加した。前日までの合宿にもかかわらず優秀な成績で一位となった。

十一月二日に宮崎市公会堂で第八回西部合唱コンクールが行なわれた。山口大学メンネルコール、鹿児島大学フロイデコールなど覇を競ったが、西南学院グリークラブが接迫した演奏の結果第一位となった。

十四日いずれも西部代表となった福岡合唱団、福岡女学院合唱団と共に資金集めも兼ねて、電気ホールにおいてコンクール優勝記念演奏会を催した。第一部は各合唱団の課題曲及び自由曲、第二部でグリークラブは黒人霊歌と諧謔曲、第三部で福岡合唱団が森脇憲三氏作曲、交響曲“長崎”の抜萃を唱った

<sup>16</sup> 原文のママ

<sup>17</sup> 原文のママ：二十三日か？

あと、合同合唱でヘンデルのメサイヤからハレルヤコーラスを演奏した。当日の演奏は一般に低調であった。

全日本合唱コンクールは十一月二十三日、仙台市レジヤース・センターで開催された。ここは旅館が非常に悪く、冬だというのに薄い掛蒲団一枚という有様だった。こんな悪い条件ではあったが、当日の演奏会は非常に素晴らしく、聞きに来ていた諸先輩をうならせる程の出来だった。しかし、審査員の間ではドン・コサック合唱団の真似みたいだと誤解をうけ優勝することは出来なかった。昨年に引き続き三位に入賞した。

十二月十二日に電気ホールで催された福岡合唱協会演奏会に賛助出演した。コンクール入賞団体として品位ある演奏を行なった。

クリスマス讃美礼拝は三〇三号室で行なわれ、シューベルトの「ドイツ・ミサ」を演奏したが、これは、もっとも西南学院グリークラブのあるべき姿であった。

## 西南学院グリークラブと私

福永 陽一郎

私の一家が福岡に移住したのは一九四〇年（昭和一五年）の春でした。関西学院中学部の一年を修了していた私は、西南学院中学部の二年に編入されて、私と西南学院の接触の第一歩が始まったのです。当時の記録は、西南学院グリークラブ四十年史に明らかにされるでしょうけれども、私か保存していたものは、東京の下宿が空襲で全焼したために全然残っておらず、記憶もたしかではありません。私が編入された当時、中学部の音楽の先生は桐山愛海氏で、クラブ活動には音楽部というのはなかったようにも思えますし、転入したばかりの春——第一学期に、何だかシュトゥウンツの「歌えいざ若人」とシューベルトの「神聖」を指揮させられた記憶があって、あれは宗教部「ゲッセマネ会」の合唱団だったのか、それとも有志だったのか、とにかく中学部グリークラブというのは、次の年に桐山氏の代りに江口保之氏が音楽の教師として来られてから出来たように憶えているので、はっきりしませんとにかく私は当時から大へん生息気で、人の頭に立つのが好きなようでした。

井手伊武さんを中心にして、戦前の専門部グリークラブの黄金時代は一九四〇年でしょうか、一九四一年でしょうか。今はすっかり忘れ去られてしまった演奏会場に、市記念館と仏教青年会館とあって、その市記念館の方で開かれた西南学院グリークラブの演奏会は、大へん寒かったのを憶えていますからいづれにしても一九四〇年の秋以降のことです。私は賛助出演してピアノ独奏をやらされました。曲はウェーバーの「舞踏への誘い」で、戦時中だったせいか、大へん寒いのに楽屋に火がなくて、指がかじかんでうまく弾けず、弾き終わって楽屋にもどった頃やっと指があたたまって丁度弾き頃になっていたのに、と大へん惜しく思ったこと、こればかりは馬鹿に強く印象に残っています。謝礼として丸善の図書券の五円のをもらい、二円五〇銭で、第一書房から出版されていた大田黒元雄訳のパウル・ベッカー著「ブラームス評伝」を買いました。大へん美しい装訂の本だったので、それをえらんだのでしょうか。少年の私にはブラームスなんか一向に興味を持っていなかった筈ですから。

一九四一年、私は音楽の江口先生の協賛のもとに、と云っても例によって私個人が大いに独走して、西南学院中学部グリークラブをつくりました。その時の五年生に、今、RKB東京の梅北さんがおられたと思います。四年生に安田保正とか松丸二郎とか、戦争で死んでしまった優秀なのがたくさんおり、後に大学グリーからシャントゥールで大活躍をした西伊宗君は私と同学年でしたが、中学では全然鳴かず飛ばず、私は彼が歌うことさえ知りませんでした。下級生は二年も一年も優秀。一年生の声変わりしていないのをソプラノとアルトにを使って、男ばかりの混声合唱（これは意外に美しいものです）をやったりしました。この中学部グリークラブは、私が五年生になるまで三年間続きましたが、私か五年のとき一年に入って来たのが長弘君で、ですから私の音楽仲間が一番古いつきあいは、二〇年にわたる彼とのものです。

一九四三年の専門部グリークラブの戦中最後の演奏会の劇的な光景は、あまりにも有名、かつしばしば語られてきました。その演奏会に私か関係したことは、私にとって本当に印象深い、精神の奥底に大きな財産をもたらしたもので、多くの幸運につきまといわれ、感激的な出来事に数多く出喰わした私ですが、あのような純粋に美しい精神の盛り上がりを経験したことは、あとあとあまりなかったようです。あの会こそは、青年の心情の美しさが、音楽をとおして結びつき、実をひすんだ最もすばらしい結晶と云えるような気がしています。

その会のあと間もなく、専門部の方々も、安田のような私の同僚も、みんな戦争に行ってしまいました。中学部グリークラブは国民歌謡ばかり唱っていました。明けても暮れても「海征かば」でした。そして一九四七年市内中学校の合同音楽会を最後の華として、福岡の学生音楽活動は散ってしまったのです。

戦争が終って、みんなが軍隊から帰って来て、帰って来ない同僚たちのことを悲しんでいる頃、一九四五年の秋には、西南学院のグリークラブはまだ復活していませんでした。一九四六年の春に私は東京へ出てしまったので、戦後私か西南学院の音楽活動と接触を持つようになったのは一九四九年の秋以来ということになります。

一九四九年の夏、私は突如として宝響（現在の東京交響楽団）のピアニストを辞め、福岡に帰りました。何故だったか、今となってその理由を正當に云いあらわすことは出来ません。私にはときどき衝動的に去就を決めるくせがあるようです。とにかく一九四九年の七月から五一年の一月まで、私は福岡に住む運命を持っていたのです。その期間は、別に私がいたから云うわけではありませんが、戦後福岡楽壇の黄金時代であり、西南学院音楽の黄金時代であったと云えましょう。

私は一九四九年の九月、宗教音楽の大曲を演奏する目的の大きな混声合唱団として、西南カレッジエイトコーラルを設立しました。西南学院グリークラブのメンバーの大半や、神学部の学生などが男声の中心で、女声は主として児童教育科の学生と西南関係の諸学校の教職員及びその家族でした。最初の参加者は百名を越していたと思います。ただ私自身アマチュアの団体に未経験だったために、多くの運営面での失敗を残しましたし、私の音楽への情熱はとかくバランスを失ないがちで、今思い出すと冷汗ものです。西南カレッジエイトコーラルは、その後、筑紫野合唱団や福岡ユーフォニック合唱団を併合し、私の離福のとき、九大のコーロステラやコールオルフォイスの半分（別の半分は御承知のようにフィルハーモニック合唱団と一緒に福岡合唱協会をつくりました）、それに福岡放送合唱団と合同して、福岡合唱団になりました。

私たちはよく冗談に、この一九四九年からの二年間を、福岡楽壇の戦国時代と呼びますが、石丸寛氏

のフィルハーモニック合唱団、森脇憲三氏の交声会、高島氏のコールオルフォイス、安永武一郎氏のコーロステルラ、それにライラック合唱団と西南カレッジエイトコーラル。これだけの混声合唱団がそれぞれの存在を競ったあの頃は、それだけでも大へん華やかなものでした。

話を西南学院にもどしますと、グリークラブは指揮石丸寛にピアノが私という組み合わせで、進藤邦彦、毛屋禎吉、長弘というリーダーをかかえたゴウカな顔ぶれで、関西学院が初めて来福した一九五〇年の七月には、当時も勿論最高のアンサンブルを誇った関学に対して、このオールスターキャストは如何？とばかり、ハデな演奏をしたものです。他に現在の毛屋夫人、立野サトさんは立派なコンサート・ピアニストでしたし、私の亡くなった妹はソプラノ歌手でした。前にも後にも一回きりだった「セイナン・グランド・コンサート」はこの顔ぶれを総動員したのですが、そのプログラムの内容の豊富さは、今でも、西南学院は勿論、日本中のどんなに音楽の盛んな大学でも望めないほどのゼイタクなものです。又、私の亡妹を主演に、進藤のピンカートン、毛屋のシャープレスで演奏した「お蝶夫人」は、文化祭の聴衆の紅涙をしぼりましたし（これはほぼ完全な全曲演奏でした）、大学、短明大学などの文化祭の音楽プログラムは、当時の福岡楽壇の話題をさらったものでした。だいたい西南学院の音楽活動は、福岡の音楽界を九大と二分して立った、長い歴史と大きな功績を残したものであったわけですが、その最も華やかな一時期に私が関係していたのは、私にとっても大へんしあわせなことだったと、今になってもなお、なつかしく楽しく思い出されます。

一九五一年二月、私は又々突如として離福上京しました。飛ぶ鳥あとをにごさず、だったかどうか自信がありませんが、その後の西南グリーと私との接触は、一九五七年のシャントウールの演奏会及び五九年の四十周年の会ということになります。

こうして並べたててゆくうちに、紙数の何十倍にもなりそうな数々の思い出が胸の中を去来し、それらを切り捨て切り捨て書いているうちに、つまらない年代記のようなものになってしまいましたが、この裏に、ずっしりと重い記憶追憶のページがあるのを察して、許していただきたいと思います。

(筆者はグリーOB・東京コラリアーズ指揮者)

## 『合唱談話』

ティちゃんこと 毛屋 禎吉

時 一九五九年三月某日 午後三時頃

所 大阪産経ホール喫茶室

人 (Y) 福永陽一郎 (日本で一番ゼイ肉のない指揮者)

(T) 風野三郎「ティちゃんこと毛屋禎吉。フォー・コインズのリードテナー」

その他にもいたけど失敬してカットノ

状況としては、YとTは何カ月ぶりに、而もどちらもが住む東京でなく、旅先の大阪で偶然出会ったところ。とも角しばらくぶりのオシャベリのあげくである。

Y「コーラスブームだってね」

T「ジャーナリズムでいってるだけさ。週刊誌の種、つまり記者のメシの種にね」

Y「何しろ東京でヴォーカルグループがボーフラみたいにわいてくるってほんと？」

T「多いね。テレビやラジオで仕事しているだけでも十指に余る。その他いろいろあるらしい」

Y「でもブームって言われているのは、どこまでもプロのヴォーカルグループについてで、合唱連盟関係の合唱団とは別の話だよ」

T「うたごえが盛んじゃない？酒場だっとうたごえ酒場。合唱喫茶なんて出来てるよ」

Y「君はプロになっちゃってるから、よく解らないんだ。アマチュアの合唱は昔も今も変わらないよ一生懸命やってるだけさ」

T「立場がまるで違うからね。好きなようにやってたらオマンマにひびく。でもね、『三ツ児の魂』『雀百まで』のたとえ通りよ。学校時代のひたすらに唱った気持は今も生きてる。オーバーワークでキツイ時も唱い始めるとピンとしてしまうよ。因果な生まれつきだね」

Y「グリーの頃は毎日音楽漬けだったね。朝から晩まで一緒に音楽、音楽、合唱はもちろんだけど随分いろいろ勉強したわ。そうそうオペラの真似もやったし、宗教音楽専門のコーラスを作ったり、ジャズもかじった——。どん欲な音楽青年だったよ、君は。コメディアン・ハーモニストもよかった。コンちゃんと長ヒロシがいたっけ」

T「あれから、やがて十年経とうとしてる。早いもんだね。このごろのグリー・ボーイ達はどんなふうに合唱してるんだろうな。機会がなくて聞けないけど、興味があるなあ。やっぱり時と共に進歩してゆくからきっと段々良くなってるに違いないね」

Y「伊藤武雄先生達のまかれた種が伸びてゆく。僕等も大ぶんコヤシをかけたから、きっと今じゃ相当な木になってるよ」

T「何年やっても、毎日唱ってても、一向に易しくならないもんだよ合唱ってやつは。難かしいなあ。でも滅法やたらと楽しいもんだよ。この愉しさを一度知ったら百年目さ。グリー・ボーイズはもう逃げられない。魔女の手の中にもがくのみだね」

T「幸せなんだね、つまり。シビれるからね。これもいわれぬ恍惚界。フフフ……」

Y「コインズ始めてから一度も一緒にやらないね。何かやりたいな」

T「ぜひやりたいね。凄くイカスやつを何かね。考えとくよ」

☆ ☆ ☆ ☆

だけど、その約束はまだ果されません。お互いに忙しすぎて、東京で仕事してる二人なのに、あれ以来会っていない始末です オワリ

一九五九年 七月某夜

(筆者は昭和二六年専門学校英文科卒・グリーOB・元指揮者・現在男声四重唱団「フォーコインズ」リードテナー)【四十周年記念ステージプロより】

## 随 想

コンちゃんこと 進藤 邦彦

今に想えば小生がグリークラブに入会した時の模様はユーモアそのものであった。もともと唄うことの好きな小生に、西南へ行ったらグリークラブに入りなさいと姉が勧めてくれたのだが、当時の小生はオタマジャクシのオの字はもとより、グリークラブが何であるかも知らなかったのだから全く話にならない。それでも入学式終了後、早速ノコノコと講堂へ出かけて行った小生は、先輩譜氏の居並ぶ中でピアノの横に立たされた。パートは？上は何処まで出るの？……勿論小生に返事の出来るはずがない。みんなの笑いが耳に入って来て思わず興奮した小生は、何でもよいから声を出してごらん……とピアノをポツンと叩かれた時、夢中でアーと奇声を発声したのである。そして次の瞬間に小生は“テノール”と宣言された。爾来十年、ハイトーンに苦しめられ通しの小生である。

そして何時の間にか、その奇声を利用して生活を立てていく身と相い成ったのである。一応プロとなれば毎日毎晩、夜中といえども仕事とあらば唄わなければならない。今日は調子が悪いからといって休むわけにもいかない。それだけに辛い時もあるが結局は楽しいし、幸福だと思っている。唄いハモる時の喜びは全ての苦しみを忘れさせ、心を魅惑してくれるような気がする。そしてこの喜びこそグリーメン共通の喜びであり、何よりの宝であろうと思われる。

グリークラブの謔君よ！この至宝をいつまでも失わず、白髪の友となる時までも抱きつづけようではないか！

小生願わくばこの喜びを更に広く、永く、子や孫にも伝え得ることが出来ればと、そして、年寄りから子供までが一つのうたに声を合わせるその姿、これが小生のささやかなる夢であり、希望なのである。

(筆者は昭和二十八年大学文商学部英文学専攻・グリーOB・元指揮者・現在男声四重合唱団「フォーコインズ」ファーストテナー)【四十周年記念ステージプロより】

## 思 い 出

長 弘

私か音楽に足を踏み込んでからのことを思い出すままに綴ってみましょう。学院中学部に入ってからすぐにグリークラブに入り、時五年生だった福永陽チャンと知り合い、色々と指導を受けました。陽チャンがいなくなってからは中学部の音楽の先生だった古沢先生や、後に転任してきた葛西先生の御世話になり、五年生の時には校内音楽会では声楽部門で第一位の賞を授与されるまでにグリークラブや音楽の時間に親切な指導をして戴きました。専門学校にいた頃は、新宿の“ラ・セーヌ”でシャンソンを唱っている木村正昭さん等とアメリカ人のチャペル等に賛美歌やフォスターの歌を唱いに出掛けていました。大学に入ってから、音楽を基礎から学ぶために桐山先生の門を叩きました。一年近く通いましたが、

私の不勉強と先生が度々交通事故（といってもフタのないドブ穴へ足を突込まれたり、お付き合いで飲まれたアルカリ、否、アルコールのために電柱に正面衝突されたとかいう例のもの）に妨げられて“コールユーブゲン”や“イタリー歌曲”が余り進まずに、ピアノ越しに先生とニガ笑いを交した頃も懐かしく想い出されます。それにも不拘、一年も通い続けたのは城南線でミッションの女学生に逢える愉しみがあつたかららしい。ミッションのユニフォームは素適だった。後に東京に出て来てユニフォームコンテストで全国の女学生のユニフォームでミッションが入賞していたのをスタイルブック(?)で拝見して悦こんだ(?)のを憶えている。外部では福岡放送合唱団や福岡合唱団で森脇先生の御指導を受け、合唱コンクールに入賞して乾杯したグラスの音が今も耳に残っています。一方、アメリカ映画の“ボタンとりボン”が上映された頃、陽チャンの発案で出来上がったコメディアン・ハーモニストで、今のジャズコーラスの前身ともいふべき男声六重唱を愉しんだものだ。その時の中村ヒコさんと君島健チャンはお医者さんに、進藤コンチャン、毛屋禎チャンと手島洋チャンはジャズコーラスのフォー・コインズで頑張っています。

大学を卒ると直ぐに上京、畑中良輔氏と福永陽チャンとで創立したおコラさん（オトラさんに非ずして、東京コラリアーズのことです）に入団、今では最も古いメンバーとして、インストラクターというメンバーと指揮者やマネージャーの橋渡しの役を果たしています。

(筆者は昭和二十八年大学文商学部英文学専攻・グリーOB・東京コラリアーズ)【四十周年記念ステージプロより】

## 合唱熱高まる……合唱団誕生

### <昭和二十九年>

この年頃になると福岡市内に於ける合唱熱も次第に高まり、新しく九州大学コールアカデミー、それにグリークラブのOBで形成された西南シャントゥール等が誕生した。又、福岡女学院が初めて全国制覇したのもこの年であった。しかし、最も注目さるべきは、生まれたそうそうの西南シャントゥールが西部合唱コンクールで優勝を成し遂げ、さらに全日本合唱コンクールで二位と同点という優秀な点で入賞したことであろう。

第九回合唱祭は、住吉中学校合唱団、舞鶴中学校合唱団等、中学校の合唱団も二校参加して、六月六日、電気ホールで行なわれた。西南学院グリークラブは小島八郎氏の指揮でクロイツァー作曲“三月の夜”エマーソン作曲“水夫のセレナーデ”二曲を唱った。各合唱団とも上出来で、レベルの伯仲が思われた。

第三回定期演奏会は六月二十六日電気ホールに於いて開かれた。小島八郎氏の指揮で、プログラムの内容はセレナーデ集、クロイツァー作品集、諧謔曲と邦人作品集、男声グブルカルテット、ロシア民謡集であったが、特にロシア民謡は好評であった。賛助出演としては、この春発足した西南シャントゥールが内海敬三氏の指揮で黒人霊歌を、又、西南女学院が今西善治郎氏の指揮でシューベルトのドイツ舞曲をそれぞれ演奏した。

興業的には入場料百円のフリー席が当って大成功をおさめたが、演奏そのものはあまり上の部ではなかったようである。

この年の演奏会で特筆すべきことは、七月十一日<sup>18</sup>に電気ホールで開かれた福岡四大学合同演奏会であろう。これは市内の四大学の合唱団、即ち九州大学コールアカデミー、福岡学芸大学合唱団、福岡商科大学グリークラブ、それに西南学院グリークラブが、お互いの交流を深めるため合同で演奏会を開こうというもので画期的な催しであったが、足並みが揃わないという感じが強かった。賛助出演は福岡女子大学合唱団であった。

演奏旅行最初のステージは十四日水巻町机クラブホールで開かれたが、張り切りすぎて失敗した。十五日福丸高校、同校音楽部と交歓演奏、十六日八幡製鉄親和会館で製鉄合唱団と交歓、十七日大分市教育会館、十八日旭化成会館、ここでは突然の停電に見舞われたが、かえって暗闇の中のハーモニーの美しさに感激された。十九日昼間は日南高校、夜は油津公民館、響きのよい会場で好評を得た。二十日鹿児島市中央公民館に於いて鹿児島大学フロイデコールと交歓演奏を開いた。フロイデコールはコンクールの好敵手であり、全員緊張して唱ったためかなりの成果をおさめることが出来た。二十一日は委員の改選があり、マネージャーに植本陽一郎氏、指揮者に山崎恒通氏が各々選ばれた。演奏旅行の最終日二十二日は、長崎東高校に於いて長崎合唱団と交歓演奏会を持った。旅の疲れが出たのか演奏はあまり良い出来ではなかった。

第九回西部合唱コンクール福岡支部予選は、十月十六日、電気ホールに於いて開かれた。課題曲は平井康三郎作曲“家路”自由曲は清水脩作曲“河童と蛙”で、山崎恒通氏の指揮で演奏した。出来が悪く結果が危ぶまれたが、自由曲に“ノアの方舟にて”を唱った初出場のシャントゥールと共に西部大会に駒を進めることが出来た。

十一月二日に鹿児島中央公民館で行なわれた西部合唱コンクールでは一位を獲得、四年連続優勝することが出来たが、審査員の公評で技術の低下を指摘された。一方、シャントゥールは前年度全国第二位の福岡合唱団を破って、初出場、初優勝の快挙をなしとげた。

第七回全国合唱コンクールは十一月三日、小倉市体育館で開催された。演奏はあまり悪い出来ではなかったが、同志社大学、東北学院、横浜国立大学について四位だった。一般の部ではシャントゥールが二位と同点だったが、二位の数が少ないため三位となった。それにしても審査の後味が悪かった。

十二月になるとクリスマスの行事が多くなる。十日に小倉市堺町小学校に於いて西南女学院、小倉ナプテスト教会、西南学院共催の“音楽と講演の夕”、さらに十二日には福岡バプテスト教会と学院の共催のクリスマス音楽会に出演し奉仕した。又、二十日にはライラックの演奏会にベートーヴェンの第九の援助という形で賛助出演し感謝された。

師走もおし迫った二十七日、悲しむべき事態が起った。それはシャントゥールのコンパの帰途、尾崎康広氏が不慮の出来事で亡くなったことである。新聞には三行ぐらいしか載らない小さな記事だったが、氏は二十五日の総会でサブ・コンダクターになったばかり、グリークラブにとっては大きな痛手であった。その悲しみを氏の親友であった岩崎氏は“グリーメン”の三号で次のように綴っている。

「我々グリーメンの中で一番うるさく、一番風当りも強く、大変楽譜がよめたのは尾崎君だろう。しかし、今では忘れられない存在である。亡くなった彼は何と云っても、もはやグリーには帰って来ない。

——中略——

唯一つ彼が最後まで望んで目的を果たさず心残りだったろうと思われるのは指揮が出来なかったことだった。最後の晩、指揮をし歌って若い十九の身を散らした。誰がこれを予想したろうか。私には今で

<sup>18</sup> 「日」追加。

も彼の笑顔が、声が私の脳裏に残っている。彼は犬死に等しい死に方をした。一月一日を楽しみにしていたのに大人にならずして去って行った。グリーの諸君、故尾崎君を個々の心に入れて益々グリーの発展に努力しようではありませんか。」氏の葬儀は福岡合唱協会、シャントゥール、グリークラブ等合唱関係の人々が見守るうちに、十二月二十九日、警固教会に於いてしめやかに行なわれた。

## 敗北から勝利へ

### <昭和三十年>

この年は比較的温順な年であったということが言えそうである。新入生を迎えたグリーは四十五名へとふくれ上がり、質量共に整った団体となった。六月十二日に行なわれた西部合唱連盟十周年記念福岡支部第十回合唱佐為祭では、永年努力した団体として西南学院高等学校グリークラブ、又、西部合唱コンクールに支部代表として三回以上出場した団体として西南学院大学グリークラブ、西部代表となった団体として西南シャントゥール及び西南学院大学グリークラブがそれぞれ表彰され、OBの西伊宗氏が十年間唱い続けた人として表彰された。グリークラブの最大の行事である定期演奏会は、回を重ねて第四回を迎え、六月二十五日にランキン・チャペルで行なわれた、邦人作品集及び黒人霊歌で手堅い演奏を見せたとはいえ、新聞の批評で賞賛されたのはソロの伴奏をうけもたれた、安永武一郎氏のみという結果に終わった。又、興業の面からも、冷房のきかない会場に多くの不満があり、券の売れ行きも上の部ではなかったようである。しかし、充実したプログラムの内容は高く評価さるべきであろう。指揮山崎恒通氏、賛助出演西南学院短期大学部児童教育科、ソロ伊藤慶子氏、伴奏安永武一郎氏であった。

合唱への熟は本学外に於いてもしだいに高まり、福岡女子大学の市内四大学合唱祭参加となって現われ、七月三日の五大学合同合唱祭となった。

七月九日のE・S・S劇への恒例の賛助出演をおえたグリークラブは、七月十一日より演奏旅行へと旅立った。七月十二日は初めての土地である広島の高島女学院高等学校の講堂で第一声をあげた。十三日は岩国の東小学校講堂での演奏を好評裡におえた一行は、本州の短かい旅をおえ、七月十七日の西部合唱連盟結成十周年記念大合唱祭に参加のため帰福した。朝日会館で開かれた同合唱祭では、小島八郎氏の指揮で西南シャントゥール、西南学院大学グリークラブ、西南学院高等学校グリークラブの合同合唱でピエロを唱った。

翌十八日は再び演奏旅行の日程にもどり、柳河へと向った。昼夜三回の強行軍、当然の結果出来は良くなかった。十九日一日帰福した一行は二十日の朝、佐賀での演奏会のために出発した。疲れのためか好評ではなかった。二十五日、小休止を得たグリーの一行は日豊線にゆられて宮崎へ。この土地はグリーメンにもなじみ深く、緊張して演奏したせいか昼の部は別として、夜の演奏はかなりの好評を博した。二十六日、大分での演奏会は県教育会館で行なわれた。二十七日、最終地折尾へ。机クラブで無事演奏をおえ、引き続き恒例の委員改選、演奏旅行の行事をすべて終った。

秋に入るとすべてがコンクール一色にぬりつぶされる。十月十六日、朝日合唱コンクール福岡支部大会に出場した。大学の部での参加校は、福岡学芸大学合唱団と西南学院大学グリークラブの二校。自由曲は学大がブラームスの“よき哉汝が住居”、グリークラブがコルネリウスの“Requiem Aeternam”、指揮は学大が安永武一郎氏、グリークラブは新しくその任についた志渡沢亨氏。

福岡支部大会は人数の制限がないところから、学大はグリークラブの倍ぐらいの人数で参加した。審

査の結果は一位は学大、グリークラブは推薦の一位となり初めて苦杯をなめることとなった。当時の模様を日誌で見ると、『何も云うことはない。唯、練習不足と云うだけ。よっぽど頑張らないかぎり小倉での勝目はない。小倉では是非勝ちたいものである。負ければ今まで先輩が築き上げた伝統が一日にして崩れ去る。やればやれることなのである』。

初めて負けることを経験したグリークラブは、精進を重ねて、十一月二日、小倉市美萩野体育館で行われた西部合唱コンクールに出場した。各支部で選ばれ参加した大学は、学大は勿論、鹿児島大学フロイデコール、山口大学メンネルコールを始め八校に及んだ。福岡支部大会で敗れたグリークラブは背水の陣をひき、ここで学大を敗る逆転劇を演じたわけなのだが、その時の感激の言葉を再び当時の目誌から拾ってみることにしよう。

『いよいよ大学の部の発表。グリーの全員は何かそわそわして心配そう。隣の学大も同じように心配そうだ。「到底駄目だ」「いや、勝ってるかも知れない」というような声が近くで聞かれる。会場の後に陣とっていたグリーの一団から「我々が一番だ」という喜々とした声も聞かれたが、男声合唱の部で一位なのかも知れない。だとすると、全体の一位というのは否定的となって来る。一人の新聞記者風の人が我々の所に近づいて来て、「西南ですか？」とたずねた。「そうです」「お宅が一番ですよ」とプログラムを見せてくれた。確かにグリーの上に①、学大の上に②と書かれていたが、まだ半信半疑。発表が始まった。係員は読みあげる。「第三位、山口大学メンネルコール」拍手が起る。きぜわしい息づかい、固唾をのむ。「第二位並びに混声合唱最優秀団体、福岡学芸大学」、どっとグリーの全員から拍手。我々が勝ったのだ。残るのは我々しかないのだから。果して、「第一位並びに男声合唱最優秀団体、西南学院大学グリークラブ」と発表、わっと上がる歓声、拍手、胸に熱いものが込み上げてくる。嬉しさで一杯だ。みんな誰かれなしに握手、喜びに輝く顔々々』。このように勝利に酔っていたが、その演奏は朝日新聞誌上の森脇憲三氏の批評によると、よく聴いている審査員なら決して一位を入れるような出来ではなかった、ということだった。

十一月の声を聞くころになるとコンクールも大詰め。そして学院恒例の文化祭も開かれるようになる。文化祭の音楽会はグリークラブの演奏で支えられているようなもの。この年は十三日に開かれ、グリークラブは“月によせて”と題して、コンクールの曲の合間に練習した“荒城の月”“月夜”“蒼き月”“夕月の夜”を唱った。

全国大会を目前にひかえたグリークラブは二十日、急行“玄海”で名古屋へ向かった。一日休んで晴天に恵まれた翌二十三日金山体育館にのぞんだ。必勝の決意を固めて出場したにもかかわらず、持てる実力を十分に発揮しえずして惜敗を喫した。順位は一位が“F.MUE LLE Lo! GOD IS HERE”を唱った関西学院グリークラブ、二位はF・ベーカーの“幻を追いて”の早稲田大学グリークラブ、三位はA・スカルラッティの“EXUATE OEO”の山形大学合唱団、我が西南学院は五位であった。

クリスマスの曲の練習でグリークラブは冬が近づいたことを知る。十二月二十三日、ランキン・チャペルに於いて児童教育科との合同クリスマス礼拝を催す。人数が少数のためか不出来だった。

## 思 い 出

小島 八郎

僕がたまたま上京した時、当時の早大グリーの指揮者だった友人の山本君（現在OBグリーの常任指揮者）に、何か面白いものはないかとタカったところ、これはどうだろうと出してくれたのが、この“思い出”を含めた一連の英国民謡集だったのです。ですから僕にとっては民謡集冒頭の“誰かが誰かと”つづいて“埴生の宿”“ロンドン・デリー”“思い出”等全部の歌が、懐しい、楽しい思い出として残っています。

その中にも特に気に入ったのは、この“思い出”の歌詞なのです。伊藤武雄さんの訳詞と一応なっていますが、つけてある歌詞は原詩をほとんど離れたユニークな味のあるもので、むしろ、作詞といってもいいでしょう。同様のことは「誰かが誰かと」「ロンドン・デリー」についても云えると思います。

さて、僕らがグリー在籍中、この歌を何回くらい歌ったのでしょうか。学間、学外のステージ、放送に、あるいはクワルテットで一寸数え切れないくらいですが、とりわけ忘れることが出来ないのは、正月の大雪の日にダブル・クワルテットで、飯塚までバスが大雪のため途中までしか行けず、汽車にのりかえてまでして出かけて歌ったことです。それは僕がグリーを離れる最後に歌ったのが、この“思い出”でした。その時の山崎、植木、中村、志渡沢、阿部、鶴君等々いつも見なれた面々にも拘らず、妙に印象に残って今でも僕の脳裏を離れないのです。

その後もしばらくはこの歌をグリーでも歌っていたようですが、今では所変ってシャントウール十八番になっているのを僕は心から嬉しく思っています。

僕らが今から十年後、あるいは二十年後に、ツルハゲの「お爺様」になった頃、又この歌を歌ったとしたら、今よりももっともつとうまく（？）歌えるでしょう……ネ。

唯一つ御注意して下さい。三番の歌詞の終りの「ではさようなら」のところは「rit」ですが、過度の「rit」はこれを次のように伝えます。「ではさよオーナラ」と。御用心、御用心。

### Cool Water 西南シャントウール

「西部の荒野を年老いたダンと私が、照りつける太陽の下を、幾日も水を求めつつ、さまよう」という意味の歌で、ソロとコーラスの「クール・ウォーター」を繰り返して歌う、すぐれた編曲で、僕の好きな曲の一つです。

五年前、まだスポーツセンターも出来ていないころ、教育会館で、五十四年卒業生を中心としてOBのコーラスを二十人位で始め、何の曲から始めようかと云っている時に、兄貴（編註内海洋一氏）が、米国で聞いた美へしい男声コーラスの曲があるからやってみないか、ということで、最初に歌ったのがこの曲です。練習の合間に、教育会館の窓から見える、凸凹の空地を歩いて行く幾組ものアベックを羨しがったりしたものでした。

この曲は、随分前に、パイオニアーズの男声合唱のレコードがSP版で発売されたようです。

## 再び敗北を喫す

### <昭和三十一年>

順風を帆に受けるといった感じであったグリークラブも、内海敬三氏、小島八郎氏、山崎恒通氏等三人の指揮者を含む十一名の卒業生を出し大きな打撃を受けた。それ故にこの年は戦後最悪の年と言わねばならないだろう。

新入生を迎えたグリークラブは五月二十二日、八幡市民合唱団演奏会賛助出演のため八幡市労働会館で、日本合唱曲集として「婆やお家」「柳河」「ドングリコロコロ」「ふるさと」を演奏したが、まずまずの出来であった。恒例の合唱祭は六月三日電気ホールに於いて催され、グリークラブは「新しき歌をエホバに向いて唱え」を歌い当日の人気をさらった。

独立演奏会は回を重ねて第五回、六月二十三日、ランキン・チャペルで開かれた。指揮は志渡沢亨氏、賛助出演は佐藤博子氏。例年のごとく、この年も雨に見舞れたが、客足は頗る好調で、かなりの盛況であった。第一部①ドイツ合唱曲集、②黒人霊歌集③ダブル・カルテットによるバーバーショップ、④日本合唱曲集、第二部①賛助出演で佐藤博子氏によるピアノ独奏、②イギリス民謡集、③ミサ曲集。前日までの過激な練習の故か、疲労がひどく声が枯れぎみで、立派な演奏だとは言えなかったが、一応ソツのない演奏会であったということは言えそうだ。七月八日の五大学合同演奏会を無事すませ、七月十日、博多発八時の夜行で演奏旅行へと旅立った。第一日の広島での演奏会を皮切りに、十二日防府の松崎小学校、十三日下関の梅光女学院、十四日佐賀旭高等学校と無事演奏をすませ、武雄の嬉野バプテスト教会の立派な温泉で疲れをいやした。一行はさらに十五日佐世保へと足をのぼし、市民公会堂で演奏会を催したが、旅行の疲れははっきりと現われ、又、弛慢けた気分もトップのコンパ事件となって表われた。翌十六日先輩の好意で西海橋、九十九島、真珠貝養殖所の見物で気分を一新、大牟田へと向かった。大牟田での演奏会は先輩甲斐田氏の属する大牟田合唱団の賛助出演で開かれた。聴衆が無神経すぎた故か気分がのらずあまりいい演奏ではなかった。十八日の柳河での演奏会は昼夜二回伝習館高校講堂、十九日<sup>19</sup>の久留米は石橋文化センターで開演、野外音楽章での合唱は初めてとのこと。又、グリークラブにとっても初めての経験。全員最後の奮闘のかいあって、まあまあの出来。噴水プールを前におき、曲の合間に眺める夕焼けの雲の素晴らしさに一同は感激した。演奏旅行の最終日は例年委員の選挙が行なわれるがこの年は新マネージャーに多伊良皓司氏、指他者に野口秀樹氏がそれぞれ選ばれた。又今回の委員会の構成で特筆すべきことは、新たにパートリーダーという委員が出来たことであろう。パートリーダーの役目がパート練習のみならず、パートの人事面にもたずさわるということから、従来二人であった人事は今回より一名に減らすこととなった。

パートリーダーという制度は二十八年度ころの記録にも見られるもので、当時の関西学院グリークラブとの交歓演奏会を通して得た制度である。以来暗黙のうちに受けつがれていたもので、今回初めて委員として陽の目を見るに至ったのである。新しい委員の最初の活動の対象となるのはコンクールである。課題曲は北川冬彦作詩、高田三郎作曲“風”。自由曲は清水修の男声合唱曲集で“三つの俗歌”より「無宿者の歌」と決定した。

コンクールにそなえての合宿は十月五日から九日まで山の家に於いて行なわれた。この間に西部合唱連盟理事であり又西南女学院の教授であられる今西善治郎先生をお迎えして指導を仰いだ。

<sup>19</sup> 「日」追加

全日本合唱コンクール福岡支部予選は十月二十一日、電気ホールで開催された。大学の部での参加校は西南学院グリークラブの一枚のみ。且つ、模範演奏団体として出演したのであった。西部予選は別府市公会堂で行なわれ、大学の部は鹿児島大学フロイデコール、山口大学メンネルコール等各支部より七校が集まり覇を競った。出演順序の一番は鹿児島大学で自由曲は“Soon a will be done”。そして二番目が西南学院グリークラブ、三番目は山口大学、自由曲は“De Anmals a-comin”強敵的にかこまれる結果となった。競争相手を持たずに西部大会に駒を進めたグリークラブは不利だった。しかし、日ごろの練習の成果は充分に出して無事演奏を終った。発表の結果は意外だった。第一位山口大学メンネルコール、第二位西南学院グリークラブ、第三位鹿児島大学フロイデコール。一位と二位は同点。しかし、山口大学の方が課題曲の一位の数が多いところから一位は山口大学となったわけである。かくて輝かしき連勝の記録は音をたてて壊れ、敗れることを知らなかったグリークラブは苦き盃をのまねばならぬこととなった。

創立四十周年を迎えた学院は、十一月九日、十日の二日間に渡って記念祭を催し、グリークラブも西南高校グリークラブ、西南シャントゥールと共に音楽祭に参加した。

この年からの新しい試みとして西南学院短期大学音楽部と西南学院グリークラブ合同の第一回音楽礼拝が十二月十四日西南女学院ロウホール、十二月二十二日西南学院ランキンチャペルでそれぞれ催された。指揮は今西善治郎、野口秀樹の両氏であった。十二月はアルバイトに行く学生が多く、頗る低調であった。プログラムの内容は、女声合唱メンデルスゾーン作曲の聖譚曲“エリヤ”より「山を見あげよ」、トンプソン作曲“主は招き給う”、男声合唱は“黒人霊歌集”、混声合唱はローズウィーク作曲、ミサ第一番“ト長調作品百”を演奏した。

十二月二十二日は、又、西南学院グリークラブと西南シャントゥールの第一回の合同クリスマス・コンサートでもあった。賛助出演にグリークラブと西南女学院の混声合唱を迎え盛況裡に終わった。賛助出演の不調に対して西南シャントゥールの出来は素晴らしく好評を博した。

ウイーナーフィルハーモニー、ドン・コサック合唱団等の来福で収穫の多かったこの年もこのようにして幕れていった。

## シャントゥール独立演奏会開く

### <昭和三十三年>

この年は昨年のコンクールに於ける敗北を一気に挽回しようとする気運が高く、色々な対策が練られ、内部に対しては勿論、外部的にも一応の成功を修めた。又、この年は他の合唱団に於いても非常に意義のある年であった。

その一つは、九州大学コールアカデミーである。コールアカデミーは三年前に発足し、合唱祭、五大学合同演奏会、コンクールと活動をつづけていたのであるが、ついに一月十三日、九州大学医学部講堂で、荒谷俊治、杉村靖弘両氏の指揮の下に、第一回定期演奏会を開くに至ったのである。伴奏に九州大学交響楽団を迎えての“歌劇合唱曲集”は特に劃期的なもので好評を博した。

他方、西南シャントゥールも産声をあげて三年、合唱祭、全日本合唱コンクール入賞、スインギング・クリスマス、そして多くの賛助出演等と活躍を続けて来たが、ここに初めて独立演奏会を開くまでに成長したのである。

即ち五月二十四日、藤原歌劇団、東京コラリアーズ等の指揮者として活躍中の福永陽一郎氏を招き、西南学院児童教育科合唱団に賛助出演を仰ぎ、電気ホールに於いて華々しく開催したのである。プログラムの中には、本邦初演の“五つの愛の歌”等があり絶讃をあげた。

六月に来日したカリフォルニア大学グリークラブとの交歓演奏会は、六月十九日、電気ホールに於いて定期演奏会を三日後に控えて行なわれた。開幕に日米両国の国歌の演奏があり、君が代を歌い初めた時に、聴衆が一せいに起立した時は一同感激した。西南学院のグリークラブは日本民謡を演奏したのであるが、対抗意識が強く、力みがちで上出来ではなかった。それに対して、カリフォルニア大学グリークラブが実に楽しそうに歌っているのを聞き、多くのことを勉むことが出来た。

第六回定期演奏会は六月二十二日、ランキン・チャペルに於いて、石丸寛氏の指揮のもとに、ピアノ伴奏に山崎隆子氏を招き行なわれた。第一部はロシア民謡、ダブルカルテット、中世聖歌、第二部は日本民謡、山崎隆子氏のピアノ独奏、フォスターアルバム等六ステージであった。「ロシア民謡」「フォスターアルバム」のほか「日本民謡」の“ずいずいずっころばし”等は石丸寛氏の編曲で、中には今回のために特別に編曲されたものもあったが、練習期間が短く、グリークラブの実力に比べて大曲が多かったためか演奏は思ったほどではなかった。しかし、氏の指導により、グリークラブはあまりにも多くのことを教えられ、大きな刺戟を受けた。そして、前年停滞ぎみだといわれていた状態から完全に離脱することが出来た。

福岡五大学合同演奏会は第四回を迎え、七月一日、電気ホールに於いて行なわれた。グリークラブは石丸寛氏細曲の「黒人霊歌」を歌ったが練習不足のため演奏は不調であった。

演奏旅行は七月十一日の山口大学メンネルコールとの交歓演奏会を皮切りに行なわれたが、セカンドの某氏の待つて来た風邪が蔓延し、毎日誰かが発熱している状態だった。

十二日下関梅光女学園、十三日防府市防府高校、十四日長崎国際文化会館、長い汽車の旅で疲れが出たのか演奏は今までに不調。一日休養をとって十六日佐賀市の白石高校と公会堂との二の演奏会、十七日は瀬高公民館で昼夜二回、この二、三日は長崎での体みが効いたのか尻上がりの好調であった。十八日は大牟田。昼間は大牟田北高校、夜は一般公開で市民会館。この会場は響きが悪く毎年なやまされるのだが、この年も例外ではなかった。十九日は伝習館高校体育館で昼間二回、夜は一般公開で、一日三回のステージになやまされた。二十日に鹿児島に着き、二十一日、フロイデコールと交歓演奏会を公会堂で行なった。旅行も十一日目、一昨日の一日三回の演奏で疲れたのかあまりいい出米ではなかった。最終日の二十三日は宮崎の公会堂で演奏会を開いた。最後だと思って全員頑張った故か普通の演奏をすることが出来た。この年の演奏旅行は山口大学メンネルコール、鹿児島大学フロイデコール等との交歓演奏会が持て有意義な旅行であったが、十九日に波多江忠氏、二十一日に福田豊氏が母堂が亡くなったために帰福しなければならぬような事態になった。このようなことは今までになかったことであり、全員心から哀悼の意を表した。

八月二十日、早稲田大学グリークラブの演奏会に友情出演し「中世聖歌」を演奏したが、早大の幅の広いハーモニーに比べ、グリークラブはメンバーのアンバランスであまり良い演奏とはいえぬようだった。

西部合唱コンクール福岡予選は、十月二十日、電気ホールで行なわれた。課題曲はカールツエルナー作曲“旅路”自由曲はパレストリーナの“Adormus Te”、指揮は馬頭経明氏がこれにあたった。この結果、八十六点で二位の九州大学コールアカデミーを十点引き離して一位を獲得した。この日の演奏は“従

来の形より脱して、よい傾向になりつつあり、今後期待がもてる”と審査の先生から批評があった。

全日本合唱コンクール西部地区予選は、十一月二日、長崎市国際文化会館で開かれた。この会場は演奏旅行の時に使った所であり、なれているはずであった。コンクールのためか全員コチコチに上がってしまった。決して良い出来ではなかったが、二位に大差をつけて戦後通算七回目の優勝をとげた。点数を見てみると、一位西南学院グリークラブで一八〇点、二位山口大学メンネルコール九〇点、三位鹿児島大学フロイデコール七二点であった。森脇憲三氏の批評によると「課題曲は音が下りまじい演奏だったが、自由曲でとりもどしたようだ」とのことであった。

恒例の学院祭は十一月七日から三日間行なわれたが、八日のオール西南音楽会にグリークラブが軍歌と童謡集を、西南シャントウールが十九名で黒人霊歌を、又グリークラブのメンバーで構成されているフォア・キャンドルズがハワイアン・メロディー集をそれぞれ歌い花をそえた。

全日本合唱コンクールは、十一月二十三日、大阪東府立体育館で行なわれた。全員すっかり上がってしまい、その上セカンドテナーが音を外してしまったために失敗に終り五位に甘じなければならなかった。一位には関西学院グリークラブを敗った同志社グリークラブが選ばれた。なお、高校の部で福岡女学院が二位に人賞した。

コンクールから帰って来たグリークラブには多くのステージが待っていた。その始めは十二月五日の前原地区中学文化祭である。ここでは演奏旅行で歌ったものが使われたが非常に好評であった。

西南女学院との合同の音楽礼拝は第二回を迎え、十四日西南女学院ロウ講堂、二十三日西南学院ランキンチャペルで行なわれた。又、合同合唱は今西善治郎氏の指揮でクリスマス・キャロル集を演奏した。

第二回スインギング・クリスマスは、シャントウール<sup>20</sup>、グリークラブ合同で十一月十七日、電気ホールに於いて開かれた。クリスマスキャロル集、クリスマスソングス等は特に好評で盛大な演奏会となった。

米軍基地へのクリスマス・サービスとしては、十五日雁の巣米軍基地、二十七日板付米軍将校クラブで行い大変喜ばれた。

この年の数多いステージの中で一きわ異色的なのは十一月六日、少年院を訪れたことであろう。“帰ろ帰ろ”“汽車ポッポ”などは非常に少年達を喜ばせ、謝礼をそのまま少年院に寄附して感謝された。

## 第一回西部三大学合同演奏会開く

### <昭和三十三年>

この頃になると博多の音楽人口も増し、それにつれて音楽会の回数も増加し、従ってそれだけ音楽的刺戟が多くなった。そして、グリークラブは前年をうけて少しずつではあったが向上しつつあった。そのためかレパートリーの傾向も次第に変化し、今までよりも音楽的にどっしりした大曲の占める割合が多くなり、室外で簡単にハモれる曲は少なくなって来た。同じように、ステージの性質も異って来て、今までのように二、三曲歌うだけで終るようなステージは少なくなり、ほとんどがグリークラブ独自の演奏となるステージが増して来たのである。

この年新しく生まれたステージのうち大きなのに西部三大学合同演奏会がある。結果がどうであったにせよ、春季休暇中にもステージを持ち、他の大学と交流を持とうとする意欲の表われであった。又、

<sup>20</sup> 原文のママ

その話が出て来た時の様子を西部合唱連盟理事長今西善治郎氏はプログラムの中で次のように書かれている。

「昨年、長崎での西部合唱コンクールの後、西南グリーの優勝カップを囲んで三校の合同合唱が始まった。そして、その素晴らしいハーモニーは人々の足を止め、合唱は次から次へと続き、何時果てるとも知れなかった。会場前の海に見える美しい広場である。その時、今日のこの会の話がまとまったのである。それぞれの大学に学風のある如く、合唱の世界に於いても、それぞれの楽風を打ち立てて、素晴らしい持味のある合唱をひびかせて欲しいものです」。

多くの期待をかけられたこの演奏会は、三月十五日、電気ホールに於いて行なわれた。エールの交換の後、山口大学メンネルコールが山津豊氏の指揮で「黒人霊歌集」と「ロシア民謡集」、鹿児島大学フロイデコールが坂本藤雄氏の指揮で「毛銭の三つの詩」と「奄美大島民謡集」、西南学院グリークラブが馬頭経明氏の指揮で「ミサ曲」と「日本歌曲集」を唱い、最後に今西善治郎氏の指揮で、昨年のコンクール課題曲「旅路」等四曲を三大学合同で演奏してその幕を閉じた。

この演奏会は結果的には、四年生の卒業、それに休暇中という無理がたたってか、各大学ともメンバーが充分そろわず、必らずしも成功とはいえなかった。又、聴衆の入りも悪く、約五百名に止まっただけであった。

グリークラブのユニフォームは、昨年は白の半袖で胸に録の線が入ったものをあつらえたのであるが、演奏旅行等洗濯する機会が多く不便なために、ナイロンのシャツにしようという話が出て。四年松枝氏、三年小杉氏、二年檀浦氏、一年吉村氏の四人の製作委員会なるものが結成され、今日のユニフォームが出来上がった。

第七回定期演奏会は晴天に恵まれ、六月二十一日、ランキン・チャペルに於いて催された。馬頭経明氏の指揮で第一部「ドイツ合唱曲集」「黒人霊歌」「宗教曲」、第二部「アメリカ民謡集」草野心平作詞、多田武彦作曲、組曲「富士山」を唄った。演奏それ自体は必らずしも好調とはいえず、音はずすことなどしばしばだったが、最後の“富士山”は大変意欲的だとして非常に好評を博した。なお、賛助出演には今西善治郎氏指揮の西南女学院短期大学合唱団が「中田喜直作品集」を唱った。

七月五日、第五回五大学合同演奏会は電気ホールで開かれ、グリークラブは“五つの日本の歌”を唱った。そつのない無難な演奏だった。

この年の演奏旅行は十七日間にわたる長いものであった。十二日、宇部の演奏会は渡辺翁記念会館で八十五名の山口大学メンネルコールと交歓の形で行なわれ、最後の合同演奏は宇部グリークラブを加え二百名近くの大合唱となった。十四日、小倉の演奏会は東筑紫学園講堂、十五日、大分の演奏会は大分学芸大学学芸学部合唱団の賛助出演で行なわれた。当日は同市在住のウォーカー牧師夫妻の結婚記念日とかで、野外パーティーに招かれた。十六日はステージはなく先輩諸氏の好意で別府の地獄めぐり、高崎山と見物した。十七日は宮崎での演奏会。ここは毎年のことながら、聴衆の入りもよく演奏も好評で、演奏中に近くの寺の鐘が入る等、ユーモラスな雰囲気だった。

十八日、再び休養を取った一行は、十九日、鹿児島大学フロイデコールと交歓演奏会を中央公民館で行なった。ここの演奏会では変な対抗意識もなく、終始なごやかな気分では進行された。二十日、大牟田演奏会は昼夜二回、市民会館で開かれた。演奏会は悪くなかったが、満員の客からは何の反響もなく盛り上がりなかった。賛助出演は大牟田合唱団。二十一日は柳河演奏会。朝、昼、夜の三回、橘陰ホールで行なわれた。二十二日は甘木演奏会。二十三日は久留米で小休止。二十四日、同市公会堂で久留

米高校女声合唱団の賛助出演で開かれたが、演奏は最低の出来だった。二十五日の佐賀での演奏会を無事終了した一行は、最終地長崎へと向かった。一日ゆっくり休養をとって二十七日は朝からチャペル・サービスに出かけた。演奏会は先輩の内海洋一氏、武立真一氏が作られているカルテット“どんく”の賛助出演で開かれた。券の売れ行きが悪いとかで一時は危ぶまれていたが、まずまずの入りだった。一日休養をとったとはいえ、長い旅の疲れはかくし切れず、演奏は上出来とはいえなかった。

毎年、演奏旅行の最終日に行なわれていた委員の改選は、旅行に出てない部員の意見が入らないという理由から九月十日に延期された。この年から機構が変わり、部を代表するものとして総務が置かれた。これは従来のマネージャーが外に出ることが多く部員との連絡が疎かになりがちなどころから、これを是正するために設けられた制度である。初代の総務には小杉次氏が、又、指揮者には徳永和彦氏がそれぞれ選ばれた。

第十三回西部合唱コンクール福岡予選は十月十九日電気ホールで行なわれ、西南学院グリークラブでは自由曲に G. Allegri 作曲の“Miserere”を唱い、九大を抑えて一位となった。課題曲は平井康三郎作曲の“月夜”であった。

十一月二日の下関市早鞆学園体育館で行なわれた西部合唱コンクールでは、全員緊張しすぎたためか、すっかり上がってしまった。そのため課題曲は半音以上も上ずって自由曲では手堅い演奏をしたとはいえ、一同落膽していたのであったが、審査の結果は意外によく一四四点満点で一四二点という好成績で優勝した。第二位山口大学メンネルコール九三点、第三位九州大学コールアカデミーの順であった。二、三の審査員の批評によると、今までのグリークラブにない素晴らしい演奏だとのこと。又、他の合唱団の人々からもアンサンブルの良さを称えられた。

全日本合唱コンクールは十一月二十三日、郡山市の市民会館に於いて開催された。出演順序が一番目であったため比較的落ち着いて唱えたのだが、西部大会のとき同様に課題曲が上ずり、惜しくも入賞を逸した。

恒例の音楽礼拝は十二月十日に、西南女学院ロウ・ホール、十二月二十一日、ランキンチャペルでそれぞれ行なわれた。西南女学院短期大学合唱団との合同演奏は今西善治郎氏の指揮で、ヘンデルの“メサイヤ”からの抜萃を唱った。練習不足のため散々の出来ではあったが“メサイヤ”を歌ったことは大切な経験の一つとなった。

この年頃から米軍基地内での演奏会が多くなって来たのであるが、そのきっかけとなったのは、前年より板付基地内での教会の日曜礼拝に毎週二十数名がチャペルクワイヤーとして参加することになったためである。この年の基地内での演奏会は、芦屋が六月、十二月の二回、板付が十月、十二月の二回、その他雁の巣基地や日米合同クリスマス等に出演している。自分達の演奏が外人の間にも評価されたとき、又、それ以上に自分達の歌うアメリカの歌が、アメリカ人の間に立派に通用することを喜んだのである。

スイング・クリスマスは十二月十八日、電気ホールに於いて満員の盛況の裡に開かれた。演奏は必ずしも上出来ではなかったが、比較的好評だった。舞台効果が色々と考えられ、十分に演出されたので、その意味では楽しい音楽会だったといえよう。

## 創立四十周年記念演奏会を開催す

### <昭和三十四年>

合唱団の活動の中でも冬は比較的に楽である。だが一月から二月までは年度末の総決算でグリーンメンが久し振りに自分の机に向かって教科書をヒモトク期間でもある。グリーンメン同士のノート写し等日頃のメンタルハーモニーの成果がこの上もなく都合がよいのである。試験が終れば春休みであるが、グリーのスケジュールも春の合宿でフタアケである。

“山の家”で修養会としてコンクールの時ほどハリツメタ気分ではなく、のんびりとして練習も案外楽なのである。この合宿で鹿児島で開催される西部三大学合同演奏会の曲の仕上げをする。曲目は日本民謡から最上川舟歌、三つの子守唄他である。合宿中に昨年から具体化され始めていた四十周年行事の具体案が委員会で決定された。グリークラブO・B名簿の作成、記念レコードの作成、記念ステージの件、四十周年誌の発行、以上がグリークラブの原案となり予算面の裏づけは先輩の寄附とグリーからということになり、第一回のO・Bとの懇談会四月二十五日に決定。

三月二十二日鹿児島で西部三大学、帰るとすぐに三十日に関学グリーと交歓演奏会（電気ホール）

グリーンメン日誌より……六時より電気ホールにて関学との交歓演奏会。関学のメンバー五〇人に対して我々三〇人、ボリュームの差はまぬがれないが、演奏自体はあまり良く出来たと思われぬ、テナー等は良く声が出ているが、いづこも同じで人数でカバーしている。少し荒けずりの感がある。我々グリーは宗教曲、日頃の練習程度程の出来、かなりよく歌ってくれて嬉しい。欲をいえばもう少しボリュームとバリトンのひびきがほしいもの、それに反して日本童謡集の出来の悪かったこと、最低とまではいかぬが50%の出来、大変残念で気残りがする。特に交歓で感心したのは関学のステージ・マナーといふ、演奏の時の様子といふ、終ってストームのやり方といふ、大いに我々反省する必要がある。あのだらしなさ我ながら前に立つのがいやになる程だ。演奏も大切であろうが、あとがさらに大切であることは皆も知っておることだろう。関学はさすが全てに於て我々の上にあることが実証されたし、大いに参考になり我々反省させられた面が多い。 T記

——四月に入るとグリーンメンは先輩を訪ね、古い同窓会名簿を頼りにして、先輩の消息を訪ねる。第一回の懇談会迄にある程度の形を整える為で、その懇談会の時により充実したものにしようと思つた編集部は、はりきっている。古い頃と最近と終戦前は良く判ってきたが、あとはさっぱり、つまりグリーの活動もその頃が盛んであったということが判る。

### 四月十四日新入生歓迎演奏会【ランキン・チャペル】

グリーンメン一同新入部員の獲得で大童、三十数名入部基礎教育に入る。新入生諸氏がグリーに入った当初如何にその感概を新にしたか日誌で紹介してみよう。

四月二十日、我々一年生はグリークラブに入って今日で三度目の練習だったが、最早すっかりこの場の雰囲気にもなれて、これから先一生懸命<sup>21</sup>練習出来そうです。このクラブに入る前迄はこの部は固若しい<sup>22</sup>部じゃないかなあ？と考えていたが入って見ると大変朗らかで愉快的なクラブであったので大変嬉しく思っています。この部に入ったからには、これから先上級生の期待にそむかないように、一生懸命グリーのためにベストを尽したく思います。又我々一年生はグリークラブに入部した事を誇りにしていま

<sup>21</sup> 原文のママ：一生懸命？

<sup>22</sup> 原文のママ：堅苦しい？

す。これから先も今と同様上級生の方は我々の最上の指導者であって下さい。 M記

四月二十二日、私達新入生に対して上級生のかくも盛大なる歓迎を受け感謝の意にたえません。グリーの面々は皆おしとやかで上品であると前から聞いていたが、今日はたっぷりユーモアを含み冗談を飛ばしなごやかな雰囲気になりました事は親しみやすいという感も受けました。私達新入生としてわずかながらグリーラブの雰囲気に慣れてまいりました。私達としては練習に出来るだけ多く参加したいと思っております。初歩からなので音符がよめず大変困っています。なんとか早くよめるよう勉強し一日も早く“おんぷ”をよめるようになりたいと思います。 T記

四月二十四日、練習ではまだ部分的にはまずいところもあるが、今日は歌詩をつけて「さくらさくら」及び「最上川舟唄」をやった。我々新入生にとってはグリーそのものは「憧れ」的な存在であったが、現在こうしてグリーの部員として共に練習に励む事が出来るのは光栄である。これからは伝統あるグリーの一員として自覚し、責任ある行動をとらねばならない。来年そして再来年と我々現在の一年生が進級するにつれ責任もより大なるものとなってくるであろう。その為にも今から練習に励みグリースピリットに徹していくことが大切だと思う。グリーも今年で四十才とか、過去の事についてはほとんど知らないがよくもまあ……と思う。我々もよりよき先輩の指導よろしきを得て一步一步前進したい。 K記

四月二十七日、上級生諸氏の御指導を受けグリー面々との雰囲気にもなれ、男性合唱<sup>23</sup>というものを理解出来たような気がします、まだまだ……合唱は各人が個々にかつてに声をはりあげて歌うのでなく、全員の気持が一致しないと美しい曲であってもきたなく聞えるということになるので、仲々むかしいようです。こういう点も序々に勉強していきたいと思いますが、ただ歌うだけ、いや歌えるように頑張ります。より一層きびしい御指導の程を。 U記

四月二十五日第一回グリークラブO・B懇談会、元マネージャー池田先輩（西鉄観光勤務）にお世話を頼み徳永先輩を始め、鶴原先輩他諸先輩、グリー原案の四十周年記念行事につき検討、予算面で少しあまいのではないかと批判、その他趣旨内容に於ては全員異存なくよりよき四十周年のため福岡在の先輩を中心に頑張ろうと一同張切って記念撮影。

五月二日より合宿。飛石連体をとられて、ぼやきながらも今年より初参加の新入生を加え五十四名で五日迄“山の家で”<sup>24</sup>女っ気なしの生活に入る。五月十一日学院創立四十三周年記念式典に参加 Ah! Seinan を唱う。五月二十二日RKBスタジオにて四十周年記念レコード吹込み、指揮内海敬三、伴奏古沢嘉生、出演西南学院グリークラブ（二年以上）、西南シャントウル、曲目、校歌 Ah! Seinan 夕焼け小焼け、野バラ、She wants brave noble men。

五月二十三日・総会、今日は遅刻する人も少なかった。写真撮影の為であろうか？だが昨日人事より云われた事すら守りきらぬ人がある。それも上級生に多い。同様な事は今日のみに限った事ではない。余程心を引締めねばグリーの“明日”への前進が思いやられる。練習曲は“南部牛追い唄”楽譜を見ただけでは案外簡単な様だがなかなかのシロモノ、一年生の熱心さに比べて上級生はノホホンとしている。練習後は総会あり、例によって例の如く長々と続く。しかも議題がサブ・コンの件であれば例年通り(?)二・三時間の議論である。三時間にしてどうにか終る。六月の下旬委員改選があるそうだがその時が又思いやられるものだ。最後に部室は一年生が掃除する事——グリーの慣例——最近言葉使いが急に悪く

<sup>23</sup> 原文のママ：男声合唱？

<sup>24</sup> 原文のママ

なった様に思われる。この傾向は二年生に特に見られる。赤ランプまではいなくても黄ランプというところか。 S記

六月七日、一年生初ステージの合唱祭。朝日会館で催されるのは最近始めであるが西部の合唱人口を示すお祭りで次から次へとステージが変わっていく。良くそこ迄のびでき<sup>25</sup>たものでこれも合唱連盟の功績か。福岡は九州の第一の都会という理由からか東京みたいにビンからキリまでの演奏会があるのではなく案外に良いのがやってくるので、福岡のお客さんは耳がこえているし九州のお客さんだといって馬鹿に出来ないとはある識者の弁であるが、今日のごとく文化の発達している時でも通用するかどうか一寸考えさせられる。合唱人口からいえば関東関西に次ぐということだが。……

当初の計画は四十周年記念ステージは石丸寛氏にお願いして曲迄用意していただいたのであるが氏の都合でお流れとなり、四十周年記念ステージはグリーO・Bの福永陽一郎氏にお願いした。その最初の練習日を迎えたグリーンメンは自然に感想を述べている

六月十一日、今日は招待指揮者福永陽一郎氏の初めての練習の日、どれだけの期待を持って来られるか、或は私達が氏の期待にどれだけ応え得るかということが皆も切実に感じていたことではないかと思う。そのせいか以前のマンネリの練習態度からは、いくらかでもぬけだして練習に臨んだのではないか。グリーにとって福永氏が来られたことは一応新しい変化であり、刺激でもあるのだから。しかしながら私達が考えなければならないのは何か変わった事がなければマンネリに陥り練習態度がだらけてくるというのでは真のアマチュアリズムとは云えない。私達自らが自分の歌う音楽に興味をもち、もう一步積極的態で練習に臨むことが肝心ではないか。

指揮者が家で或は練習日以外に譜を読んでこいというのも、こうした精神の一つの表れだと思ふ。そして練習中どうしても解らない、理解の出来ない個所があれば、積極的に質問する位のファイトを持ってほしい。このような心構えで練習に臨めば、自ら練習にも「はり」がでてくるのではないか。曲の解釈その他には勿論指揮者に対して絶対従わねばならない。しかしこれを作るもの形があるものにすのは私達グリーンメンに他ならないではないか。もっと練習には積極的に、そして私達一人一人がグリーを形造り、成長させてゆこうではないか？グリークラブは“音楽”をする Club であるはずだからです。幸いにも福永氏がこれからグリーを指導してゆかれる、という機会に恵まれたのです。この様な機会にめったにあるもんじゃない。もっと氏を音楽的に出来るだけ利用しよう。その方が氏は喜んでくれるのです。福永氏の第一声「自分が何を歌おうとしているかを充分知って歌うこと」の中には、合唱音楽をするに当って最も簡潔で又全ての意味を含んでいることは皆理解出来ると思ふ。このことは常にグリーンメン自身のモットーとすべき言葉であろう。

要約すれば、たゞ練習時間だけ指揮者に従って歌うだけではグリーンメンの資格はないということである。自ら研究し歌を自分自身のものでしよう<sup>26</sup>とする積極的態が肝心なのです。このことは日頃の練習態度にも影響してくる（発声音、発声、曲の感情、解釈等全てを含むことはいままでもない） S記

六月十四日、一時過ぎよりRKBのリハーサル室に於て徳永さんにより発声練習をやり“Five Sea Chanties”をしていた時福永氏が来られたので指揮者交替、今日で招待指揮者福永氏の練習は一応終る。氏は本日二十一時十分の急行で帰京される。この四日間はグリーは二つの変化に見舞れた。一つは福永

<sup>25</sup> 原文のママ

<sup>26</sup> 原文のママ

氏が来られた事と一年生の一部の者者<sup>27</sup>が“切られた”事である。一年生が切られたのは残念だが練習の能率をあげる為には止むを得ないことだろう。

さてこの四日間グリーメン各人は福永氏より何か得る物があったであろうか。昨日徳永さんより何かを得て呉れとの事だったが、記載者の主観では各人相当に得るものがあったと思う。只英語の発音等一部の者だけが云うのではなく各自、予習復習して調べておくべきである。先日から何度も云われているのに未だに赤鉛筆を持っていない者が多い。ペンで書いたのではステージに立って見えません。見える程度胆の座った奴がいますか？特に一年生が持たぬという事は不可ない。経験が少いのだから云われた事はどんどん書込むべきであると思う。 S記

O・B名簿の作成も仮名簿の作成迄にこぎつけた。住所が判らないので苦勞しているが、二十年三十年前のことゝて先輩の記憶もずいぶんうすい。でも同窓会名簿の中から「コイツもイタ、ア、コイツモ」とでてくる時は思わず嬉しくなる。でも中には第二次大戦でグリーにいた関係かどうかは判らないがその“耳の良さ”に戦場に散っていかれた先輩が多くあられる<sup>28</sup>のは残念な事である。

七月十二日岩国

八時四十分駅前集合今度だけは遅刻のないようにといていたのに三名、エンギが悪い。乙藤氏よりさし入れ、池田、岩崎先輩らの見送りで一同元気に出発、“つくし”岩国十三時五十六分、音文の方々と貸切バスで宿泊所へ。帝国人絹岩国工場寮に荷を下す。一年ははじめての旅行のせいかわれ着きがなくスモウを取ったりサワイだりハーモニカを吹いたり。又カメラを持って来たのが十五名位。やはり生活安定か？講堂で練習、カメラ禁止とは！大食堂でメシ。いよいよ演奏旅行に出発してからの初めてのステージ。出来ははじめにしては良い方で80位。やっと一日が終った所！今からか大変、どうやら外は雨。だんだん激しくなる。一同やゝ興奮のうちに床に入る T記

七月十四日飯塚（水害で中止）

岩国発準急九時五十分、いよいよ第二日。飯塚は新開拓地。汽車はだんだん九州へ。外は雨、雨、雨、川は濁流。畑にも水はタップリ。放送がある。山陰線が不通になったとの事。小月迄来た所汽車は止って動かず。水害の為一時間半立往生とのこと。これでは間に合わぬと早速荒木マネージャーバスの交渉。所が外へ出て驚いた。小月駅前には腹位の大水。荒木はやっとのことでバスを呼んで来る。一同急いでのり込んだがバスののろいこと。それもその筈バスは浮いている。下関にやっ到着く。所がサア大変鹿児島本線筑豊線は大水害でストップ。どうなることかと一同途方に呉れる。とにかく行ける所迄行こうと汽車にのり込む。河合君行方不明で一同ヤキモキ。やっとの次の列車でカケツケ危うく出発間にセーフ。門司着門司から臨時列車で……。所が枝光迄行ったら終点とのこと。枝光よりすぐ先で不通になったとのことで多くの客は次の駅迄ゾロゾロ歩いている。一同バスをつかまえようと一旦駅の外へ出たが市電市バスオールストップ。予定時刻よりズーッとおくれるからと飯塚へ電話をかけようとしても電話がとどかぬ。委員一同大ソウドウで雨の中を重い荷を待ったまゝ立往生四時間。ついに飯塚演奏会は涙をのんで見送りとなる。

警察に頼みに行き非常電話で連絡をとってもらおうとしてもダメ。ついにあきらめる。さて小倉迄とにかく引き返す事にしたがバスはパー。やっとのことで通出したバスで八幡迄。八幡より之も通出した市電で小倉へ。外は街中至る所大水害。ガケクズレ。やっとのことで一同宿泊所へツカレテグッタ

<sup>27</sup> 原文のママ

<sup>28</sup> 原文のママ

リ。十時迄夕食を食べに外出、門限に遅れるものありで頭痛大ヘン。之でグリーも大赤字。ついに個人負担が百五十円となるとにかく良い経験になりました。ではおやすみ、神よ守り給え T記

七月十五日小倉、七月十六日久留米、七月十七日熊本

久留米末十一時九分熊本着、熊本はグリーとしても初めての地しかりがんばろう。駅頭にて諸O・Bや支部長らの舵撈。開口一番“キビキビと学生らしく…”一同キョトン。バスの横にペナントをはってRKKへ。ヤレヤレ大変なことになったゾ。続いて熊本日日新聞へ。玄関前でAh! Seinan等をハモル。一寸手ゴワイゾ。松之井旅館先輩O/Bの家。一級旅館に一同御満悦。ユツタリとしてナカナカよい。庭も大変気にいった。四年は別、誰だ！動きたくない？夕食後大洋デパート文化ホールへ。靴は禁止とのこと。エレベーターなしで8階迄ヤレヤレ。カルテットの曲目は大丈夫かと先輩の目が光る。ソラキタ！大ハリキリで歌う。出来は予期以上で80～85点。支部長やカサイ先輩やその他のO・Bも大へん喜んでくれた。一同心おきない様。解散門限十時半久し振り。各パートでコンパの流行。バリトンの食べる事食べる事。来年も又キット来ルゾ。今年のコンクールの旅館もここに決定。 T記

七月十八日甘木、七月十九日<sup>29</sup>柳河。七月二十日<sup>30</sup>武雄、七月二十一日佐賀。七月二十二日

皆各々自由起床十一時朝食。昨夜は一応演奏旅行の終りだったのでおそく迄起きていた。四時位迄電灯がついていたようだ。麻雀の音も聞えていたネ。一方プログラム編集会議が開かれていたようだ。さて十二時に旅館を出る。頭の良い連中が駅迄荷物一ケ十円で請負っていた、結構タクシー代が浮くのだから面白い。一行の乗った汽車は一路ふるさとへ。途中佐賀、鳥栖で数名降りる。ごくろうさま。原田駅の手前で列車ストップ。機関車の脱線。全く今度の旅行はツイていない。四時四十分博多駅着解散。ごくろうさまでした。尚明日はよろしく頼みます。

七月二十三日飯塚

七月二十六日福永陽一郎氏の練習

演奏旅行も終りいよいよ記年演奏会も近まって、一寸異常な気持の流れが漂って皆なそれぞれに忙しくなってきた。ソリストの長先輩も来福され伴奏の山崎さんを迎え、肝心の我々に福永先輩と役者はそろった形。

七月三十日ゲネ・フロ

七月三十一日テレビ・リハーサル

RKB徳永先輩の御好意で四十周年記念をテレデ放送。

第一景 グリークラブ AhAh! Seinan 夕やけ小やけ、カチューシャ

指揮福永氏 ソロ徳永君

第二景 O・B 希望の島 徳水麟之助氏指揮

第三景 カルテット メケメケ 徳永、岸川、杉山、柴田君 河野教授

第四景 座談会、司会古川アナ 徳永君、福永氏 徳永氏 河野教授

第五景 グリークラブ Go Down Moses Set down Servant Ah! Seinan

指揮福永氏 ソロ長氏

八月一日テレビ出演

<sup>29</sup> 原文のママ：十九日

<sup>30</sup> 原文のママ：日

「O・Bの方々にも忙しい中をスタジオにかけつけていただいて今日の為に一週に一度練習時間迄もうけてもらって、日頃の重役、教授も慎妙にカメラとニラメッコ、井手先輩の海軍の制服がひととき目立つ」

午前十時五十分RKB集合、十一時より第八スタジオにてテレビカメラリハーサル。福永氏よりヒソヒソ声で8割の声をかせといわれて一同ニンマリ。いよいよリハーサルが始まったのに岸川君が来ず一同心配。やっと終り近くに来る。ねていたとのこと。いよいよ一時第八スタジオ集合。生放送とあって一同の緊張は弓の如し、やがてスタート。ドキドキガクガク。それでもまあ無事に終わりました。ゴクロウサマデシタ。

日頃の重役・名教授らもいじらしい程にキンチョウしてシンミョウだったのも後の語り草。結果はまあまあうまくいったとのことあゝ今夜は定期演奏会。一同RKBよりその足で電気ホール控室へ

### 創立四十周年記念第八回定期演奏会

今日の為に幾多の人々が頑張ってきたか、それぞれの人なりの感慨で迎えた四十周年であったが四十年の流れというものは確かに長い。一つの合唱団の命脈を戦争中を通じて保ってきたのも唯グリーメンの“歌の心であろうか。感激感激。この日の為には遠くは東京からも多く先輩がかけつけた。久し振り旧交を暖めたとステージワキでワイワイガヤガヤ。

進行はO・Bの鶴原太郎氏によって順調に進む。

#### プログラム

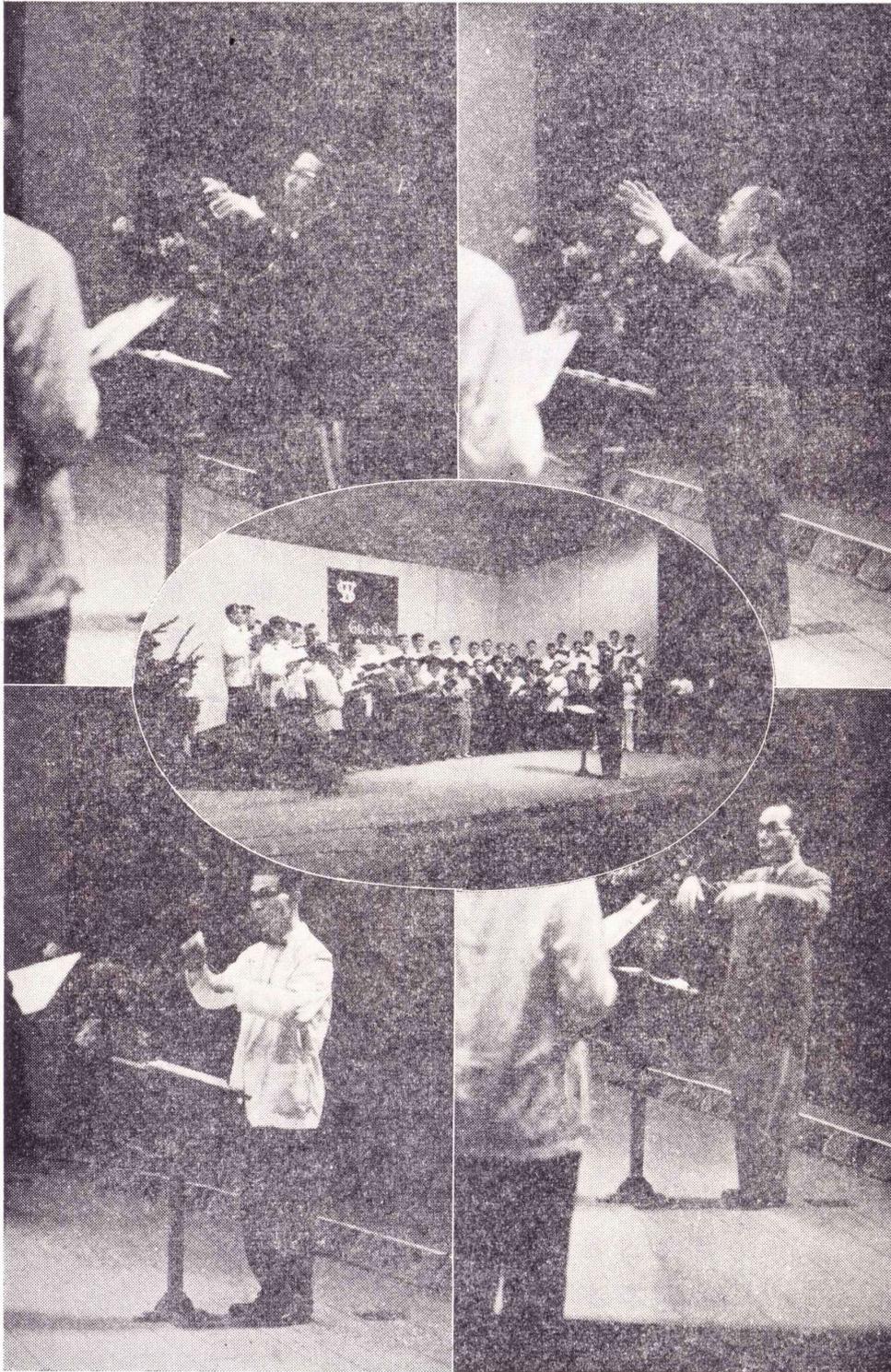
- |                         |          |
|-------------------------|----------|
| Ah! Seinan              | 指揮 徳永和彦  |
| 第 一 部                   |          |
| 【I】 宗 教 曲               | 指揮 福永陽一郎 |
| 鎮 魂 曲                   |          |
| ミサ曲作品 12 より             |          |
| 主、憐みたまえ 神の恙             |          |
| 新しき歌をエホバに向いて唱え          |          |
| 【II】 日 本 民 謡            | 指揮 徳永和彦  |
| 秋田草刈り唄                  |          |
| 南部牛追い唄                  |          |
| 三つの子守唄                  |          |
| 最上川舟唄                   |          |
| 【III】 Five Sea Chanties | 指揮 福永陽一郎 |
|                         | バリトン 長 弘 |
|                         | ピアノ 山崎隆子 |
| Shenandoah              |          |
| Moblie Bay              |          |
| Blow ye winds           |          |

Across the Wetsern ocean

Rio Grande

第 二 部

- 【IV】 四十年の思い出の曲 指揮 徳永和彦  
夕やけ小やけ  
カチューシャ  
野ばら  
深い河  
思い出
- 【V】 西南シャントウール 指揮 内海敬三  
Cool Water
- 【VI】 グリークラブO・B  
希望の島 指揮 徳永麟之助  
自由の歌 指揮 鶴原太郎  
ふるさと 指揮 松本省一  
Lord, I want to be Christian 指揮 内海洋一  
いくさびと 指揮 井上良助
- 【VII】 家路・黒人霊歌 指揮 福永陽一郎  
家 路 (初演) バリトン独唱 長 弘  
黒人霊歌  
Go down Moses  
Go down Death  
Set down Servant



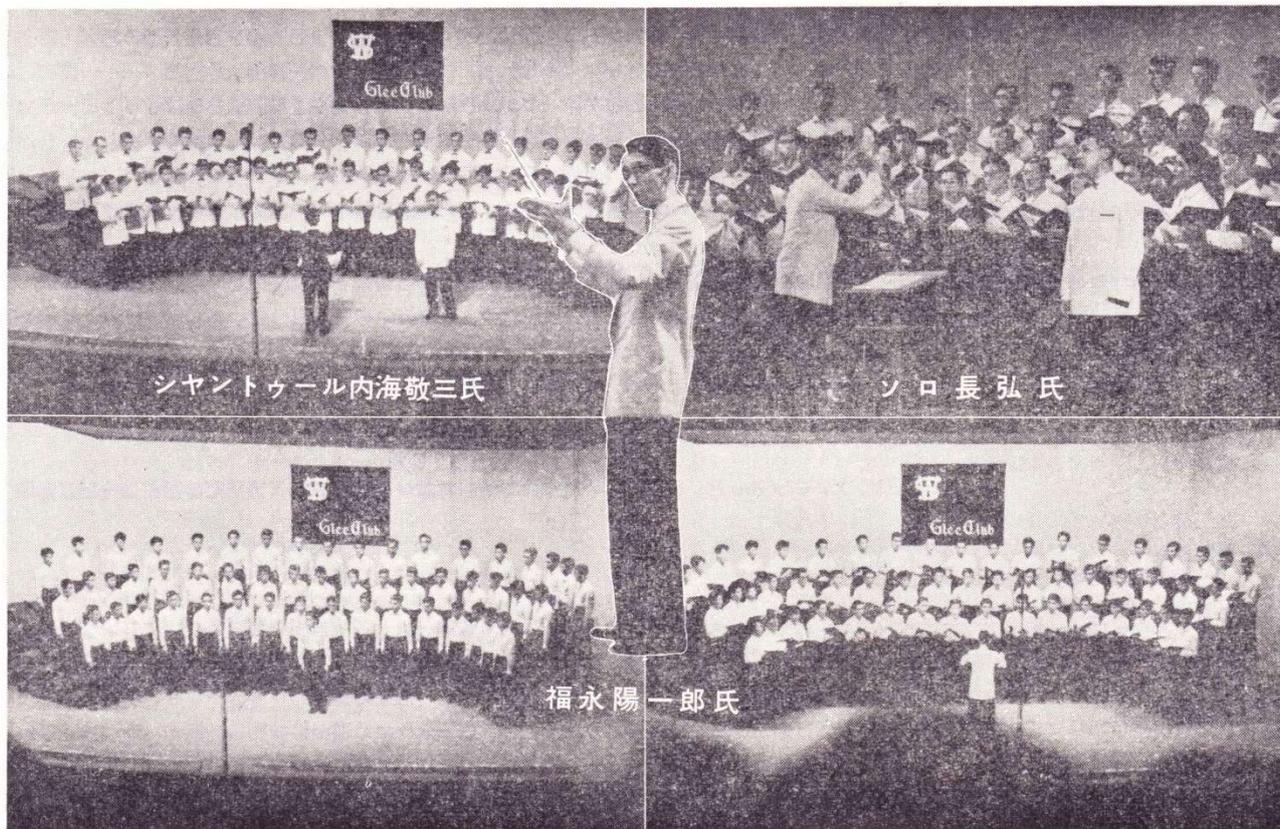
特筆すべきことは  
O・Bのステージで  
各々スーパーO・Bの  
方々がなごやかに歌っ  
てくれたこと。徳氷麟  
之助、鶴原太郎、松本  
省一、内海洋一、井上  
良助各先輩らの指揮も  
よかったし歌ってくれ  
た各O・Bの数約六十  
名にも大感激、中には  
海軍少佐殿の制服姿も  
よかった。司会は鶴原  
先輩良かったヨカッ  
タ！！特にこのステー  
ジはよかった。河野院  
長の挨拶も良かった。  
我々の母C・Kドー  
ジャー夫人のお出まし  
にも感激した。すべて  
がよかった。かくも盛  
大に記念会を持つこと  
が出来たのも全員の一  
致団結の賜で深甚の感  
謝々々。終了後数え切  
れぬ程の花束に埋った  
先輩現役の喜び！すぐ  
地下のニューアサヒで  
交歓会を開く。河野持  
範<sup>31</sup>教授の音頭で一同  
乾杯。集う同好の志百  
五十名。

左上 鶴原氏、全下 内海(洋)氏、中 井上氏、右上 徳永氏、全下 松本氏

年代を忘れ同じ情勢のもとに心を一つにして肩を抱きあって喜ぶ。各O・B紹介、現委員新委員の紹介、甘える現役優しいO・B、皆さんどうも有難うございました。この感激を忘れずに、五年後に又会いましょう。最後に不幸にも本日集う事が出来ずに異郷にはかなく散って行かれた先輩の霊よ安かれ！ T記

年代を忘れ同じ情勢

<sup>31</sup> 原文のママ：河野博範？



最後に四十周年記念演奏会に役員で活躍された二人の言葉をもってこの“四十年の歩み”の結びとします。

## グリーを思う

西南学院グリークラブも今年で四十周年を迎えた。今年は関学・立教・青山・同志社と各大学の合唱団もそれぞれ記念すべき年を迎えたのであるが、西日本の一角に今も尚西南グリー健在の偉容を誇っているのは、ここ迄グリーを育てられた先輩の並々ならぬ努力とグリー・メン一同深く敬意を表さればならぬ。

四十年間に於けるグリーの活動も。一時の盛衰はあったにしろ、創立者ミス・フルジュムのまいた一粒の種はすくすくと育ち、樹令四十才になったのである。この四十周年にあたり、昨年からは先輩を交えて準備された四十周年記念行事も関係各意の御協力できちんとその成果を上げ、<sup>32</sup>その意味からは、今年には多彩な行事が多かったのであるが、その圧巻は何と云っても創立記念第八回定期演奏会であり、先輩と共にステージの上でハモったあの感激は一生胸に残るものがあるし、先輩の方も感概を新にされたこと、思うのである。四十年………たいしたものである。伝統………現在のグリーは—これを支柱とし、学院のキリスト教精神の上に、その精神的な基盤をおいてきたのであるが、この四十年の伝

<sup>32</sup> 原文は「.」

統の推持、存続の蔭に幾多の先輩の血の滲むような努力が果されてきたことは見逃すことはできないのである。

総務 木村土岐雄

## 四十周年に想う

指揮 徳永和彦

四十年と一口に云うが、これ迄に達するには諸先輩の御努力と、御指導がなくては、とても考えられない事である。今こうして記念演奏会に私がグリーのメンバー<sup>33</sup>として、古い先輩の方々と共に参加出来、同じ道で合いつどうことの出来た事は大いな喜びであると共に私の一生の内で忘れる事の出来ない大きな感激である。

又はからずもこの期間にあたって私か指揮者として参加出来、また会をにごすことの出来たことはそれより感慨無量です。特にこの演奏会に於て、私達の先輩でしかもかってグリーのメンバーの一人であられた、福永先生の指揮で歌うことの出来た事、指導を受けこれ程有意義なことは無い。

限られた期間に非常に苦しい練習ではあったが、私達の力を考え我々に十分なる勇気を与えて下さった事は、この演奏会に十分なる自信をもって<sup>34</sup>望むことが出来、成功に導いた一つの原因である。あの大きな体でしかも長い腕、そしてさらに長い棒を振られると自然と出ない声が引きづり出される様な思いで、腹の底から歌を唱うことが出来、曲自体のニューアンスも自ずから出て来る様に思われ、ここに於て、一つの大きな今迄にかかってなかったものがグリーに見い出された様である。しかし曲・詩を唱うことが出来たかもしれなかったが、全ての曲がそうであったとは云わないが、荒々しさを思った。これは発声の問題につながると考えられるが、即ち自分の声に無理をして出す、特に f f の時にそれが目だって来るのでなからうか。

福永先生を迎えるにあたって、メンバーに望んだ唯一のことは、先生が指揮者としての道を歩んでこられた間に身に付けられた知識等、何かある、それを一つでも、二つでもよい、先生と接する間に引き出して自分達の物にする様に、そして先生の頭の内を空っぽにしようと云った<sup>35</sup>事である。これが出来たか否かは一人一人の判断にまかせよう。

私か一年間グリーで指揮して来て今日の演奏会のステージが最後であった故、又それが記念の演奏会であった事は、これ程感激なことはなかった。ステージに立ち聴衆から受ける圧迫と、グリーメンバー一人一人から受ける圧迫と、四十周年であることの重大さが自分の背に重く感じられ、初めの一発を振りおろすにひどく責任をおぼえた、しかし、あの時のメンバーの息ごみに勇気づけられ、一生懸命に腕の運動をくりかえしただけの様な気がした。こゝで演奏そのものの良し悪しは、又その出来に関する批判はしないことにする。振りおえた時に一人一人に対して感謝の気持ちで感慨無量でした。そして、神

---

<sup>33</sup> 原文のママ

<sup>34</sup> 原文のママ

<sup>35</sup> 原文のママ

共にいましての讚美歌をうたいおえた時のホットした気待と指揮という任務を不完全ながらもおえることの出来たよろこびとで、何んとなくさびしい感じを伴ない目にはじむものは一生忘れることが出来ないでしょう。

ここに、四十周年記念演奏会を先輩の方々と共に、又我々の尊敬する福永先生を迎えて終えることの出来たことは、これからのグリーにとって、一つの踏み台になるのではないか、いささかマンネリに<sup>36</sup>なりがちであったところに新鮮な空気が導入され、そこに新しい道が開拓されていくのではないか、そしてその開拓の媒介物となるものがこの演奏会であった様に思われる。

今後、グリーに残された課題は、ここ迄達して先に延び悩んでいる現状の一つは、合唱屋としての最大の目的であると同時に必然的に心要とされる発声の問題であり、これを少しでもマスター（物マネ的なものでよい）することが残された課題ではなからうか。我々常に理想に向って進んでいく、やがてその理想は達成し得るかもしれない、例えそれが何らかの型で達成せられたとしても、そこにはさらにより高い理想があるのであって、理想と現実とは常に一致するものではないと思う。我々は常に理想に向って一歩でも進もうではないか。

## 座 談 会

十一月二十七日 於 銀座 銀船（東京）

四十周年記念ステージの後、四十周年誌の記事の一つとして又現在のグリークラブのより良き発展の為に、これ迄のグリークラブの発展に努力され、尚且つ現在も第一線で活躍の方にお集り願ひ、回顧談や音楽談義を伺っては……との話が出た。

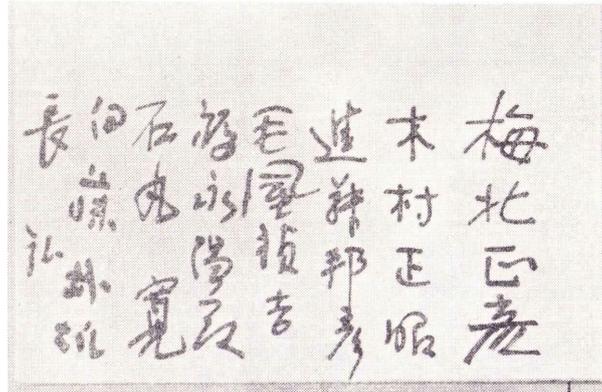
出席者の顔ぶれから、それぞれに忙しい方達ばかりなので実現性はないと半ば諦め、逆に実現したら素晴らしいぞと、RKB東京支社の梅北先輩に御相談した結果快く全ての御膳立てをして下さり、又、出席者の方々も快くこれに応じて下さって我々グリークラブが札幌で催された第十一回全日本合唱コンクールに出場しての帰途、即ち十一月二十七日実現を見るに至り、その夜和気遇靄々の裡斯くの如き楽しい且有意義な座談会とはなった。

### 西南グリー四十年をかえりみて

出席者 伊藤武雄 石丸寛  
福永陽一郎 木村正昭  
毛屋禎吉 進藤那彦  
長 弘  
司会 梅北正彦（現役部員数名）  
敬称略

---

<sup>36</sup> 原文のママ



現役 本日は皆様お忙しい所を、我々グリークラブのためにわざわざご参集下さいまして有難うございます。今度我々グリークラブが四十周年を迎えることも一重に皆様諸先輩の方々の御努力に依っているのです。そこで東京在住の方で一線に御活躍の皆様の回顧談や現在のグリークラブへの御批判等賜りたく存じます。

司会 まず伊藤先生は大正十二年高等部二年に在学して居られて丁度グリークラブ創立当時のことを御存知と思いますが？

伊藤 大正十二年に中等部卒なので初めの頃のグリークラブを知っています。初めは私が中等部一年の時、フランスス・ウエハラ（元フランスス・フルージュム）さんが当時の中学三、四年の者を指導して英語の学生歌から始めた。この頃グリークラブとは名づけてはいなかったが一応そう呼んでよい。これがグリークラブの始めでしょう。高等部が出来るとグリークラブもそのまま受け継がれたが、井上精三氏がオーケストラを始めた。演奏会を持つようになったのも高等部になってからだった。

司会 当時の新聞記事にはオーケストラが盛んだったとあるが・・即ちオーケストラがあって声楽はそれにダブルカルテットの様な形でくっついていたとか……

伊藤 そういう事だけど…しかしオーケストラが盛んだったと云ってもネエ…私もヴァイオリンを弾いていたが……

司会 マンドリンクラブもあつたらしいのですが……

伊藤 それははっきりしらない。

司会 演奏旅行は？

伊藤 私が二年間高等部にいたが、その間二ヶ所位行った。勿論オーケストラと一緒に、又当時は実力もないのにやたらとステージを引き受けていた（笑）

司会 当時外部からのグリーに対する評判は。

伊藤 サア、当時九州では九大のオーケストラもあり、これはみかけも整っていた。しかし演奏会で見てると同じ楽器部の中で一人一人の手の動きが違っている。いやに複雑な曲をやるもんだなと思って後で楽譜を見てみたら同じもので結局一人一人が少しづつずれて演奏していた事が解ったりして（笑）。又九大はコーラスはもっていなかった。従って福岡でコーラスがあつたのは西南だけだった。

毛屋 当時合唱と云うものは、オーケストラに比べると少ない存在だったのですか？

伊藤 そうでしょうね。今は数だけは大了なものですね。

石丸 数だけはネ（記者に向って）、これをしっかり書いて下さいよ。（伊藤氏に向って）昔は楽譜をこう持って歩いていたら石をぶっつけられたとか、伊藤さんはモダンだとかいわれたとか、モテたんじゃないですか？（笑）

伊藤 （笑いながら）そうでもなかったですよ。

司会 伊藤先生は初めピアノをやるつもりだったのが戦争の為に声楽に変更なされたとか聞いていますが。

伊藤 それは当時の読売新聞がウソを書いたんだ。毎日新聞は正確だったけどネ。読売には奥がベートーベンのメロディーを口笛で吹いて「アゝオレはもうピアノが弾けない」といったなんて書いてあるんだ。みんなウソだよ（笑）おかげで今でも方々でいわれる。

（ここで司会はグリーンメンと変って）

梅北 伊藤先生の頃から急にとびすぎるけれど、私は終戦前の最後の時期になる。内海洋一氏、井上良助氏そして私、と受け継がれて来たもので、部員約五十名うち常時練習していたのが四十名位だった。学徒動員でとられていって、部員はだんだん減って行き二、三名残った所で自然解消というわけです。最後に撮った写真では十二、三入いるのだが…定期演奏会は井上良助氏が最後でした。十七年の秋だったか…十八年の春だったか、小倉の西南女学院でやった。

司会（現役） その頃のグリーの評判はどんなものでしたか？

梅北 好評だった。

毛屋 当時「海行かば」が流行っていたとか。

梅北 それもあったけど、僕等は「U. B o j」をよくやっていた。

石丸 この前チェコフィルが来たからあれの歌詞がどれ程でたらめか聞かせてやりたかった（笑）

長 関学グリーの演奏会でそれをやったらチェコから来ていた牧師が泣いて来たって。

梅北 それから松本省一氏が前戦から帰って来て一緒に唄ったナ。

石丸 その頃からが西南の全盛期だ。毛屋、梅北、内海、松本、井手氏等一緒に、テナーはよくなかったがベースは優秀だったネ。

梅北 学徒動員で散ってしまったのが、終戦になって集ってまた唄うようになった。ライラック合唱団も女声部だけが残っていたのがそこに男声部が帰って来たわけだ女声部を指揮したのが内海氏そして混声が出来石丸氏が入って来た。戦争中は女の子と一緒に歌等唄ってけしげらんと云われ運動部からも文句が出たが当時部長だった笹森氏が大変力を入れてくれた。その頃ブラームスの“眠りの精”なんかやっていたかな。

石丸 ライラックの男声は全部西南のグリーO・Bでそこに初めての異分子がオレなんだ。如何にオレが優れていたか…（笑）

長 ソプラノですか…（笑）

進藤 その頃石丸さんとカルテットをやったことがありますヨ。

石丸 光栄だな（笑）当時ライラックは団長が平野氏でグリークラブが始まるから見てくれと頼まれてそれからつながり出来た。はじめ西南に行って講堂に入ったらクリクリ坊主が八人…四・四の二部合唱でオキアガリコボシなんかやった。そのうち福高では先に始めていたが、四部合唱でしょうということになりやはり二十一年の合唱祭に出るからというので石田氏一人でポスター書いて募集して“ヴォルガの船唄”“菩提樹”なんかを口うつしで夜遅くまでやっていた。でも当時は合

唱とふだんの生活とがかけ離れていたようで、僕が練習に顔を出す直前まで「ワンサン待ってちようだいネ」なんてやって、僕がやって行くとシッー、たちまちシューベルトをやったり。しかし下級生が上級生をたるんどるといつつるしあげたりファイトはあった。

司会 “カチューシャ”はエポックですね。

石丸 あのとときはうれしかった。二十二年ですが第一回のコンクールで勝ったんです。あの曲は中井さんが歌っているのを聞いて僕が編曲というわけだ。松本、井手さんと僕と東京に出張してソ連大使館に行き楽譜をネダッタ兵隊に聞くと云われた。だけどあんがい知らなかった、アコーディオン<sup>37</sup>で一人が歌い出すと皆んな歌い出す。そしてカチューシャと云う言葉を入れる箇所だけ分ってあとは作詞だ。コンクールの会場は九大の講堂だった。

進藤 僕が二年生のとき（二十三年）が第二回コンクールで課題曲はシューベルトの“Die Nacht”新入生は出してもらえなかった。自由曲は「St.ペテルスブルグへの道」でしたネ。手島洋一氏が福高を振っていました。

石丸 第一回のコンクールのときは二十五、六名だった。最近のグリーはメカニックな点に力を入れすぎて歌がなくなって来た。人間らしいパンチが入っていないネ。昔はメカニックな面ではあやしいものだったけど歌があった。

木村 今は体裁を作ることが大きくて…即ちきれいでありさえすればよい、と云ったような。

長 しかし基本的なものが出来上ったのちにパンチを入れて効果をねらうので始めは基本的なものを充分研究した上で、その後に効果を考える。始めは譜面だけを唄いその後に指揮者の味を出すことが出来るのではないか。

石丸 アマチュアの場合伊藤先生どう考えますか？

伊藤 ホドホドだね、考え方ですよ。両方あるに越したことはないが…

進藤 その点東京の団体の方がよい。

長 しかし素人の合唱団で歌も必要だけど合唱としてのメカニズムを大切にされた方が良いのではないですか…そしてそれが組上った上でうたう効果を考える。

梅北 それは違うね。アマチュアでもテクニックは既に持っているのだから。

石丸 両立すると思うね。指揮者が優秀であれば……最近のグリークラブは練習場では死んでいる。外に出ると生き生きした生活をやっているのに、だから結局練習場入ってくる時に訓練されよとして来ているのぢゃないかな。しかし本当は訓練されるのぢゃない。人間らしくない。死んでいる。日本の合唱の欠点でもあるのだが。

長 しかしメカニックな点が先行しなくてはアマチュアは駄目だ。

梅北 結局両立しないといけないがテクニックを追求すると殺される。

毛屋 石丸さんが云おうとするのは歌うことが人間内部に関する問題だということではないですか。

石丸 “第九”にしてもやれば出来る。ただほんとうに感じてやろうとしない。

伊藤 それは力がないからだよ。背のびをしているからだろう。流行歌を歌うとき、歌うことをやっている、と云うのは生活の歌だからで“第九”にそれを望むのは無理だ、生活にないんだから。

進藤 梅北、石丸さんは指導的立場から云っているので立場の相違ですかネ。

石丸 練習場でも好きな歌のときは生き生きとすごく生きている。

37 原文のママ

伊藤 全くそうだけど望むのが無理だネ。シューベルト等は日本には関係がないし、生活にないのだから。

木村 その様なことは専門家に委せてグリークラブは出来るに越したことはないが、学生らしく歌うものがあればいいね。

毛屋 人間てのは一人では歌えても、十人になると歌にならなくなるネ。

伊藤 そういうことはあるネ。

長 それは進歩した技術を習得しないからで音楽の進歩が現在そういった高度の技術を要求する段階に来ている。ただ楽しむ時代は過ぎた。

石丸 だからね、例えばメンデルスゾーンをやるとするとその時一体どの様に説明したらよいか解らなくなる。

伊藤 素人だけでなく専門家だって同じだ常に勉強みたいな事をやっているからいざ生活の歌になっても前と同じ勉強するという態度になってしまう。

木村 日本人が外国の歌を原語でうたうことをやめなければ…

石丸 そのために優秀な訳詞者が出ないと…

(この時長身の福永氏出席)

司会 さっそくカレッヂ・エイトについてお聞かせ下さい。

福永 カレッヂ・エイトとグリーは関係ない。ただ自分のコーラスが欲しかったのでグリーを足場に作った。児童教育科、学院の職員の人や先生の奥さん達とグリーのメンバーを中心に作った。結果的にはグリーが基盤になりましたがネ。グリーに相談なしで募集したらたまたまグリーのメンバーも入って来たってわけなんですけど終りには一般の人も入って来た。そして当時安永武一郎氏がやっていたコーロ・ステロラ（コールオルフォイス？）が解散、カレッヂ・エイトが解散でそれらで唱っていた人や福岡放送合唱団のメンバーなんかで福岡合唱団が出来、森脇憲三氏の交声会と合流した。その時から森脇氏が福岡合唱団の指揮をした、とに角当時は合唱団が沢山あって戦国時代だったネ。

司会 そうすると西南を中心に交声会が出来たわけではないのですか

福永 西南を中心に交声会と合同でということになるかな。それからフィルハーモニックというのが合唱協会の前進で合唱協会は石丸氏が棒を振っていた。

梅北 今の仕事とグリークラブにいたこととの関係はどうですか。

進藤 私はあります。始めライラックで唱っていた姉から西南に行ったらグリーに入れと勧められてそれ以来ウタイパナッシ。

伊藤 私は分かりません。間接的に影響していたかも知れませんが意識しませんでした、

木村 私はグリーにいたために今の私が出来ています。

福永 僕は中学にいたときの方がグリーとの関係は深い。グリーのためにピアノを叩いていましたから、そして実際にグリーに籍を置いたのは半年位でしょう。それでもその間唱うことは禁じられていました。〔ここで“彼は素晴らしき低声の待ち主である”の声あり（笑）〕他の人が音程がとれなくて県命<sup>38</sup>になっていると、ついにはがゆくて声を出すと怒られる。（笑）

進藤 ピアノを叩けばいいものを声を出すからいけない。（大笑）

<sup>38</sup> 原文のママ

- 長 僕はグリーでソロ等やったのが動機になった。だからもしグリーに入っていなかったら牧師になったかも知れない。東京コラリアーズはグリーの延長みたいなものです。それでも、なにしろ今はプロですからグリー時代のと東コラの自分とは違います。学生時代は楽しんだけど今ではイイ加減にやるとストンと落される。今日は駄目だったから明日は、というわけにはいかない。
- 毛屋 僕は交声会に入っていた頃西南のグリーがコンクールの練習をしているのを聞きに行って、その後グリーに入っちゃった。
- 司会 先輩からグリーに望む事をお聞かせ下さい。グリーは九州の一角にあつて、アマチュアの地方の合唱団としての意義があると思うのですか？
- 伊藤 上手になって楽しむ事は第一と思うけど、専門家へ続く道として考えるのは賛成しない。マァー特別に能力があつて好きな者以外は考えない方が良く、現在又プロでない以上無理にプロの真似をする必要はない。
- 石丸 大体九州産は声がいい事になっている。(笑)  
僕は思うんだが、アメリカの合唱は真似しない方がよい。勿論それぞれ違うし、ヨーロッパのがきていないからわからないけど。それはそれでいいだろう。でも自信もなくよその真似はしない方がよい。少々真似ても自信を持つことだれ。アメリカのはキチンとしているけど、しかしあれがコーラスのすべて、ではない。一人一人が歌心を待つ事を大事にしてもらいたいナ。
- 伊藤 アメリカの学校のアマチュア合唱団はそうでもないですよ、自分達の歌をやる時は素晴らしいが、外国のをやると、借りものみたいで…、しかし、指導者はすごい、プロの方は確かに石丸君の云う通りだけ合唱と云うことではイギリス人が良いと云う話だ。
- 石丸 ウィーンフィルが来た時、あのオケには頭が下った。うまい下手は別として別物だけど、その良さに幻惑されて自身を失わない様にしなければならない。
- 福永 もっと自信をもってやってもらいたいナ、地方で君等が果たしている役割は小さくない。その割に消極的だナ、もっといろんな事をやって、出来ることを、出来ないと思わないでもらいたい、プロ的になれとは云わないけれど。
- 石丸 流行にとらわれない様に、もっと巾広く考えて多くのものに接触する事は大切だが、自信を失わない事だ。僕等の頃は他所の事を知らなかった。何か探り入れようとしている時より、自分達で創造する時の方が成績は良い。
- 進藤 博多は合唱では発達しているし、そんな環境にいて、君等もある面で必ずすぐれている。
- 石丸 九州の合唱団は声がいいと云われるネ、森脇さんが指揮する団体は特にいい、コーラスはやっぱり声が大事だ。西南は声がいいと云われた事がナイ。
- 福永 石丸さんの時代はこうだった、と先輩が吹き込む、こういう回りの先輩が良くないな、悪口云ってすまないけれど、それで今のグリーはだめだと思ひ込んでいるのでないか、四年間いっぱい楽しみなさい。
- 石丸 変に他の真似をしないである程度ウヌボレていなければ。
- 福永 今度のレコード、あれはイゝネ。
- 石丸 面白い、あの中で校歌はスツパダカだ。他の面はそれなりにいゝけど、校歌だけは応援団だ。
- 長 石丸さんのいったマネしないというのは同感、四年間楽しむ事も同感。大学の四年間グリーにい

た事が、少なからず僕の自信を作る<sup>39</sup>要素になっている。良き指導者につく事も大切、レパートリーに関しては、例えば宗教曲では、どこにもひけをとらないというような面がほしい、そのためには常に勉強しなければ、ドイツにはブラームス専門の名ソプラノのおばあさんがいる。

司会 有望な人は中央に集る。そこでこういうハンディ・キャップも出てくるのではないのでしょうか。

石丸 緊密な連絡をとることが、いくらかでも良いと思う。

長 反省と、コミュニケーションの充実かな。

毛屋 楽しんでいくのが一番いゝ。ある年には質的に落ちるかも知れないが、そのうち学生合唱の問題にもぶち当たるというものだ。

石丸 音楽の道は遠いんだ。アマチュアがあんまり生意気なことをいうのは先越だゾ。それからシャンツールだけど、あれはグリーの延長ではいけない。O・Bはそれ独自に発展する場所があるはずだが…君達か今何か不満な事は。

現役 卒業後の就職の事ですネ。歌を唱っているより、いゝ点とっていゝ所に入りたいでネ。それから特に、発声の問題です。ヴォイス・トレーナーなどに関して頭を痛めています、

福永 それだ、発声が問題、どこも同じさ。

現役 メンバーがギリギリで声の選択などもできない。

福永 それは違うヨ、しかし、人の好意を当てにしたりしないで真剣に考える必要はある。誰か教授して呉れる人が要るな。

木村 いゝ声、悪い声の聞き分ける耳の訓練だって大切だヨ。

伊藤 発声の量によっても変わるが、日本人一般に固い発声を真似ているようだ。

木村 良い声の判明か。

福永 彼らは四年間でいゝ声を出したいんだ。

石丸 これからのグリーの発展にはやはりヴォイス・トレーナーが必要だね。

木村 まあ、それはそれとして、ほどほどにね…

長 ほどほどに楽しむためにほどほどの勉強を…

司会 いやにほどほどが出てまいりましたが記事としての座談会はこの辺でほどほどにして、あとは雑談といきましょうか…。

---

<sup>39</sup> 原文のママ

## 編集後記

やっと編集後記迄来た。当初の計画通りには仲々行かぬもの。ましてやとりかゝってみて始めて、仕事の重大かつ困難なことが判った。四十年の史実を書けといわれても、手許には一片の資料もなかった。先輩に当時の事をいろいろきいてまわるのにも限度がある。ずるずるとその状態で九月に入り委員改選があつて山口さんよりバトンタッチされた。

四年生は就職で殆んど手を引いてしまった形。一層責任が倍加されたのである。ほどなくして本学の図書館資料室に何か記録はないものかとあさってみた。ところが新聞切抜きをしたスクラップ<sup>40</sup>と学院雑誌“西南”にグリーに関する事が出ていた。それをみつけた時の喜びは今でも忘れられない。これで仕事も案外楽に進んでいくのではないかと思った。これを土台にして、先輩にその資料をみせ、当事<sup>41</sup>の事を回顧してもらった。諸先輩もその資料をみて懐しいのか、当時の事を思い出し思い出し話して呉れた。これでやっと年月日も正確になり、原稿に筆を走らせる速度も早まった。

発刊が遅れた事も、編集委員がより正確により詳しくを目標に順張った事を聞けば、許して頂けるものと思ひます。

最後にこの発刊に際して御協力下さった諸先輩、朝日・西日本新聞社の方々、その他心から御援助して下さい下さった皆様に厚く感謝を申し上げます。

(檀浦)

やってみてホトホト手に余る仕事でした。歴史は著者によって創作されたものじゃないか？フッとそんな疑問が沸いてきました。一年中殆んど何等かのスケジュールに追われている我々には実にかち過ぎた荷であることを認識させられたのが今度の収穫とでもいいでしょうか。

四十年もの伝統をこまぎれにして何人かの人間が夫々分担して書いたものでかなり重複する個所もあるだろうし、調査の行き届かなかつたこともあるだろう。

先づは資料の寄せ集めといったところでしょう。最後に協力して下さい下さった数人の先輩と、殆んど全部の後始末を担って苦勞してくれた森編集委員に深く感謝します。

(鈴木)

編集などやった経験のない僕にとって、文章を書くことに苦勞した。受持った範囲が昭和初年代という自分の生れる前の年代であるから、当時の時代相も解り難いし、昔のことで当時のグリーの先輩も少く故に、資料も少く、四十周年の記念誌の原稿としては余りにお粗末であつたかもしれない。でも記念誌にならなくても、我々がなめた苦勞今後、五十周年、六十周年と続くであろうグリークラブのための一つの足掛りとなるならそれでいいと思っている。グリーの創世記の資料集めのための四十周年誌であつていいと思っている

(阪井)

私はやっと編集委員の任をとかれる喜びで一杯です。別に嫌だつた訳ではなくて、この重責に耐えら

---

<sup>40</sup> 原文のまま

<sup>41</sup> 原文のまま

れなかったからです。だが私はやれるだけのことはやっただけです。

これが精一杯です。編集なんて未経験なことをやらされましたので、随分と欠点もめだつことと思います。だが諸先輩に助けられてどうにかなしとげることができました。私がいきました諸先輩や、少しでもグリーに関係あった方々や、グリーのことに関してしている方々には気持よく応待して頂きましたことを紙上をかりまして厚くお礼を申しあげます。記念誌はどうなっているのだろうと気遣っておられた方々には今こうしてできましたと喜んでいえます。これは編集員が汗を流し足で稼いだ結晶の賜の記念誌です、と晴れていえることのできたことを感謝しています。どうも長い間御援助下さいましてありがとうございました。一、二年の諸君お手伝いどうも有難うございました。（森）

文を書くことの難しさを、しみじみと感じたことは、初めてのよな気がする。資料は沢山あるが、これをどういうふうにご利用し、文章の中に折込んでゆけばよいか暗中模索の有様であった。

然し乍ら、諸先輩方の適切な助言によってまがりなりにもできあがったことを感謝します。自己の最高のものを求めたつもりであったが、幾度も繰返して読んでみても満足することはできず、当時のことを正確に、そして十分に網羅しえたかどうかは判然とせず、果してこれでよいのだろうかと不安を憶える。もっと時間の余裕があり、私事にわずらわされることがなかったら、もっと良いものが出来ただろうと思うが、それもまゝにならず全く残念だ。

然し、グリーの歴史の中で、最も私事にわずらわされることが多かった時代を少しでも精しく知ることが出来、今日の我々がどんなに恵まれているかを悟りえたことは、今後のグリーメンとして活動するのに役立つことと思う。

（山口）

早いものだ。計画してからもう二年になる前の編集委員から受継いで一年。やっと発行出来る状態になった。といってもあと何年か分の原稿を書かねばならない。

しかしこれも資料は集っているからまとめるだけだ。最初の一年がOB名簿作成。二年目は先輩の間を走りまわって資料集め。創立から昭和二十五年までの約三十年間の資料がない所からこれだけの資料を集めるだけでも相当な労力がいった。一人の先輩から資料をうるため二ヶ月も学校と先輩の間を往復したこともある。しかし古い昔の事を想い出して資料を提供して下さった先輩諸氏には何と云って感謝していいか判らないくらいだ。この四十周年記念誌を読んだ先輩や後輩達は恐らく「何んて幼稚なのだろう。」というかもしれない。しかし我々としてはそれで満足だ、何故ならば幼稚だと思われた先輩諸氏は今後もっと正確な資料を提供して下さるであろうし幼稚だと感じた後輩達は今度の五十周年誌、六十周年誌のために奮起する事だろうから。

（北島）

ボツボツと雨の音を背中に受け、紫煙をくすぶらせていた。

この数ヶ月の間いつも頭から離れなかったのは四十周年誌の事だった。就職の予備試験のできいかなの事より考えたのは俺のノルマの事だった。その割には何と遅く何と杜撰な原稿である事か、何だか書き落した事が山程ある様で、本になるのが恐い。

でもこれが、何年か経って、又この様な本を出す時に、少しでも役に立ってくれれば幸いだ。

この四十周年誌を見て先輩諸氏は何とおっしゃるだろうか。

“この二十六年から三十三年までは何んだな、これは、幼稚園の生徒でも書けるじゃないかね”

だから、俺は手ぐすね引いて待っている。五十周年誌が出来た時には、こう云ってやろうと思ってね。  
「これは、幼稚園の生徒でも書けるじゃないかね」

最後に森チャンと檀チャンへ

何度君らの頭に完成した原稿を叩きつけて、やろうと思った事か、でも君らはなお大変だった事でしょうね。

一番最後に内海さんへ色々と御迷惑様でした。

(松枝)

暮も押し詰ってやっと発刊の運びとなりました。出来上った本をとりあげた時の感激は終生忘れないでしょう。編集委員の皆様本当に御苦労様でした。

創立者の水町先生とミセス上原の住所をお知らせします。

水町義夫 福岡市飛石町

上原 蘭 和歌山市和歌浦四八〇の六インヌマエル医院

両先生御頭在です。

編集医院 執筆担当年代

松枝 康匡 (昭和二十六年～二十三年)

山口 弘史

北原 敏夫 (写真担当)

檀浦 豪 (昭和二十四年)

(大正九年～十四年)

北島 匡朗 (昭和二十年～二十五年)

鈴木 勸 (大正十五年～昭和四年)

山口 勝弘 (昭和十五年～十九年)

坂井 俊文 (昭和五年～九年)

森 猛 (昭和十年～十四年)

福岡在住O・B

写真資料提供者 (敬称略)

上原蘭 水町義夫 伊藤俊男 井上精三 伊藤武雄 徳永麟之助 万年良信 宮崎正旗 古林輝久  
鹿田三徳 内海洋一 井上良助 梅北正彦 秋根武 福島昭美 内海敬三 乙藤成美 松枝康匡 下村  
武俊 徳永和彦 北島匡朗 北原敏夫 檀浦豪 森猛 本学図書館

———— 以下 年表・OB名簿略 ————